

## 第4章 飛鳥寺の発掘調査と考古学の問題点

「日本の歴史学」では「飛鳥寺＝法興寺＝元興寺」説である。しかしこれまで見てきたように「飛鳥寺」は「筑紫の元興寺」を天武天皇が「672年～677年」の間に移築したものである。「飛鳥寺≠法興寺」である。

文献から得られたこの結論を「考古学」から立証できないだろうか。ところが「考古学」でも「飛鳥寺＝法興寺＝元興寺」説である。飛鳥寺やその周辺の発掘調査は盛んに行われているが、どの報告書でも「飛鳥寺の創建」は「法興寺の創建」である「596年」にしている。

これは「考古学」では大問題である。飛鳥寺の下層から出土した土器の年代を「596年」の「直前の土器」としているからである。しかもこの土器が「土器（須恵器）の編年」の「定点（基準）」になっている。今の「土器（須恵器）の編年」は「約80年」も早くなっている。

土器は遺跡の年代を決める「物差し」である。発掘調査は毎日行われているが、その遺跡の年代を決めているのは「土器（須恵器）の編年」である。ところが「土器（須恵器）の編年」は「約80年」も早くなっている。遺跡の年代は「80年」も狂っていることになる。「考古学」では大問題であろう。

この大問題を考古学者に理解してもらう必要がある。考古学者に理解してもらうには文献を用いて説明したのでは納得してもらえないであろう。「考古学の大問題」を考古学の発掘調査や研究論文を用いて説明する。これが本章の目的である。

## 1 飛鳥寺の発掘調査（第1次）

### (1) 1塔3金堂

昭和31年～32年にかけて飛鳥寺の発掘調査が行われた。『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告 昭和三十三年三月 奈良国立文化財研究所）（真陽社）はその報告書である。後に「飛鳥寺第1次発掘調査」といわれるようになる。

「報告書」はやはり「飛鳥寺＝法興寺＝元興寺」説を採っている。飛鳥寺の創建は「596年」にしている。

先ず「報告書」の中心伽藍から見ていこう。

飛鳥寺は「1塔3金堂（中金堂、東金堂、西金堂）」の伽藍配置であることが判明したとある。中金堂は基壇が壇上積で花崗岩の地覆石と凝灰岩の羽目石とからなり、束を用いず葛石は見当たらないとある。（図1）

塔は基壇の構成が中金堂と全く同じ壇上積で、雨落の巾をややせばめ、地覆石前角に巾1寸の面をとっているという。

東金堂と西金堂は塔を中心に全く対称的なものである。ところが基壇は下成壇上に小礎石を配する特殊な二重基壇で、朝鮮に類例が幾つか発見されているが、我が国では始めて見るものであるという。上成基壇周辺は玉石積である。下成基壇は巾約2.4尺で周囲に玉石一段をめぐらし、壇上に礎石を据える。礎石は長径2尺前後の小さなもので、大半が加工されないままの花崗岩である。（図2）

報告書はこのように書いている。



図 1 壇上積基壇

(『飛鳥の寺と国分寺』(岩波書店)より)

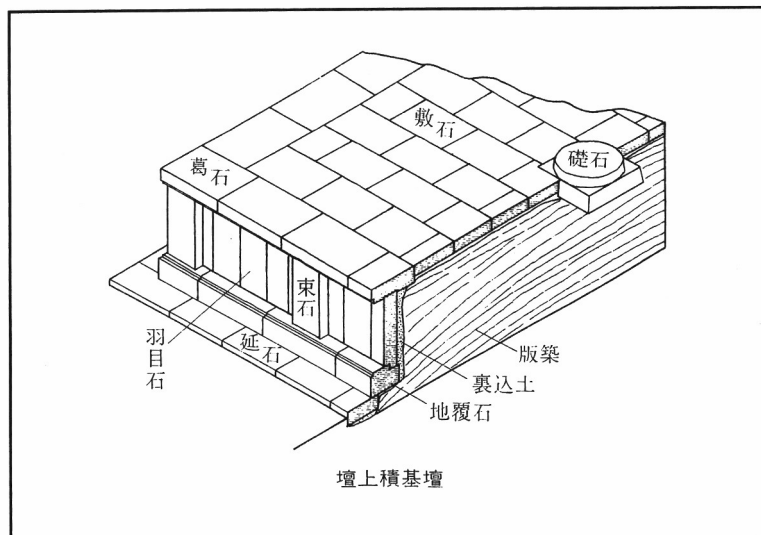
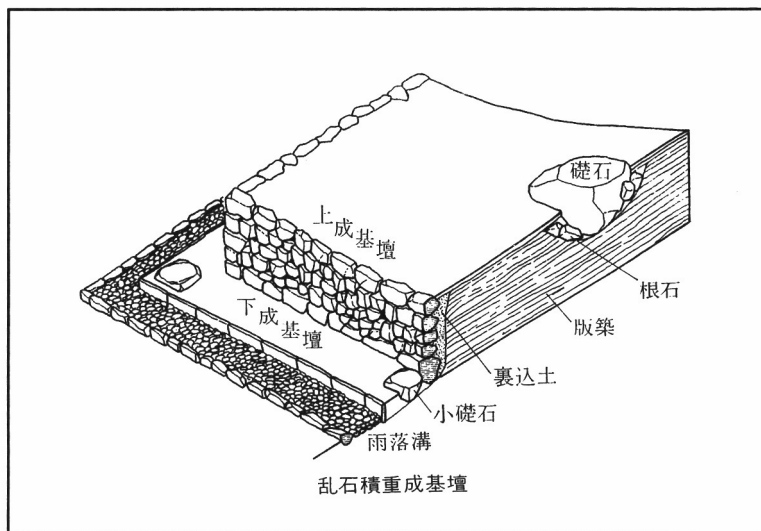


図 2 二重基壇（乱石積重成基壇）

（『飛鳥の寺と国分寺』（岩波書店）より）



〔注目点1〕

注目すべきことは、「塔・中金堂」と「東・西金堂」の基壇の造りが異なることである。設計者が異なることを意味する。

東西金堂の礎石は「大半が加工されないままの花崗岩」であるという。立派な金堂を建立するという目的からみると不自然である。東金堂と西金堂の造営は時間的な余裕がなく、急いで完成させているのであろう。「塔・中金堂」と「東西金堂」は造営の時期が異なるのではないだろうか。そうであれば当初は「1塔3金堂（中金堂、東金堂、西金堂）」ではなかったということになる。

## (2) 中門

礎石一個を抜き取られている他は、基壇・礎石ともに完存している。特に北側には軒がくずれたままの瓦堆積状態が認められ、火災にあった様子がなく、自然に崩壊したものと推定されるので、遺跡の保存状態としては申し分のないものであった。基壇は周囲地表と殆ど差がないきわめて低いもので、正面と背面の取り扱いを異にしている。

正面は長径1.5—2尺の花崗岩自然石を並べて、外に巾3尺の雨落溝をめぐらす。背面は一種の二重基壇で、巾6尺の凝灰岩延石を並べ、その外に4寸程落として巾2.4尺の余地をおいて玉石を敷いた巾2.6尺の雨落溝をめぐらす。

礎石は径3—4尺の自然石の花崗岩で、上面に径2—2.3尺の低い円形造り出しをもち、基壇面より3寸程出して据えられている。

## (3) 南門

中門同様よく残存して、遺跡としては完全に近い。地盤はこの方が三寸程高いが、その分だけ周囲の地盤が南へ上がっているので、基壇は同様に極めて低いものである。前面を雨葛石一段、背面を石敷雨落溝で処理する点も中門や回廊と規を一にしている。礎石もやや小さめという程度でよく似ていて、上面の円形造り出しを径2尺とする。棟通りに当たる礎石列の両脇間に方一尺、厚さ2寸の埴（せん）を一行に並べ、中央には礎石際に唐居敷根固めの玉石を敷いて、いわゆる三間一戸の形式である事をはっきり残している。

〔注目点2〕

南門の基壇について、「前面を雨葛石一段、背面を石敷雨落溝で処理する点も中門や回廊と規を一にしている」という。回廊・中門・南門は同じ設計である。同時に造られているのであろう。

#### (4) 西門

基壇の形式、礎石等南門と類似し、東辺中央に巾6尺程雨落の巾を狭めた処があつて、ここから東へバラス敷の通路がある。また南妻中央に築地痕跡と思われる玉石が認められた。(中略)

なお周囲に堆積した遺物中に伽藍創建時のものと思われる素弁十弁の軒丸瓦が見当たらず、それより新しいものばかりなのはそうしたわけであろうか。

〔注目点3〕

「基壇の形式、礎石等は南門と類似し、」とある。西門・南門は同じ設計で造られている。回廊・中門・東西南北の各門は同時に同じ設計で造られているのであろう。

問題は、西門には創建時の軒丸瓦が見当たらないことである。「新しいものばかり」とあるから西門は中心伽藍よりも後に造られているのであろう。「中心伽藍」と「回廊・中門・各門」は造られる時期が異なることを示している。

#### (5) 石敷広場

南門前の参道がゆるやかに上がって真南へ90尺程続いた先に、丁度その南に当たる巾12尺程を残して東西対象に広がる石敷き広場がある。中央の石敷がない部分にも建物があつた証拠はなく、現在の処では建築と無関係の単なる

広場と思われる。実は参道の南に当時の道路を発見することを期待したのであったが、そのかわりに現れたこの遺跡は、従来他に全く見ないもので、方位の振れが大きく、その方向が建物と逆である事も伽藍創建以前の周囲の自然地形または地割との関連を思わせて、なかなか興味があるが、今回の調査では確実な推定を下すには至らなかった。

#### 〔注目点4〕

石敷広場は飛鳥寺の建物とは「方位の振れが大きく」「方向」が逆であるという。「伽藍創建以前」のものであるという。石敷広場は飛鳥寺とは関係がないのであろう。

### (6) 瓦窯

飛鳥寺寺域の東南隅に接して東南より西北に延びた丘陵先端の斜面に、地山の花崗岩の岩盤を削り抜いて作られた登窯が、昭和二十八年三月に発見され報告されている。

出土瓦は黝黒色の粗粒の丸・平瓦片のみであったが、飛鳥寺に用いられたものである（註）。この瓦窯の型式は扶餘で発見されたものと全く似たもので、飛鳥寺創建時に造築され、その後も数度用いられたものであろう。

（註）「飛鳥寺出土の瓦と同じもので、創建当初のものではないが、奈良時代までは降りないと思われる。」とある。創建瓦を焼いた窯ではない。

## (7) 出土した瓦

諸堂宇の発掘によりおびただしい瓦を採集した。これらは軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦のほかには鴟尾、熨火瓦、登り面戸瓦、隅木蓋瓦などの道具物を含んでおり、他に埴（せん）も見出されたという。

「軒丸瓦」について

飛鳥時代の軒丸瓦 11種、奈良時代以降のもの 8種を得たという。それを 18型式に分類している。

### ○飛鳥時代の軒丸瓦（11種）

- 「Ⅰ型式」…素弁十弁で弁端が桜花状を呈す。玉縁がつくられず行基葺に用いられたことを示している。出土総数の30%をしめ、主要建物に用いられている。
- 「Ⅱ型式」…文様において前者に近いが、径が大きく、1例あるのみであった。
- 「Ⅲ—Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ型式」…ともに弁の先端が角張り、その先端に円点を附したもので、Ⅳ・Ⅴ型式は十一弁、Ⅶ・Ⅷ型式は九弁である。
- 「Ⅲ型式」は玉縁を作ったもので、「Ⅳ・Ⅴ型式」は完形品を見ないが尻とめ釘孔があることより、同様の作りの小型のものといえる。
- Ⅷ型式はⅦ型式の径の小さいもので、これも他遺跡の近似例より玉縁をもつものであったと考えられる。

（注）ところが表を見ると、Ⅶ型式の直径は15.6cm、Ⅷ型式の直径は16.4cmである。「Ⅶ型式はⅧ型式の径の小さいもので、」の誤りであろう。

- Ⅰ型式が創建当時百済の瓦工の指導によって作られたもので、Ⅲ型式はその後の変化を示し、より周辺の建物にも及んだのではなかろうか。Ⅶ以下の型式は、その後の小補修に差し替えられたものであることを数量の上でも示している。

### ○奈良時代以降の軒丸瓦（８種）

- XⅡ型式は、川原寺（弘福寺）のものと同一で、川原寺の窯で作られたのであろう。
- XⅢ型式は、重弁の単弁で唯一の例。
- XⅣA～D型式は、複弁八弁素文縁の同一形式で范型の小差を示し、XⅣ´は細部が不明でA～Dのいずれに属するか決められないもの。この型式は、南都元興寺創建の瓦当と同一型式である。

（注）奈良市元興寺極楽坊出土例による。

（後略）

- XⅣ型式が、奈良時代以降の８型式中９６％を占め、総数に対して４１％を占めるのは、創建以来約１世紀を経た時期に南都元興寺の造営とからんで大規模な葺き替えのおこなわれたことを物語っている。

『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告）

ここで重要なことは「飛鳥寺の創建瓦」についての記述である。

### ○飛鳥寺の創建軒丸瓦

- 「Ⅰ型式」…素弁十弁で弁端が桜花状を呈す。出土総数の３０％をしめ、主要建物に用いられている。
- Ⅰ型式が創建当時百済の瓦工の指導によって作られたもので、Ⅲ型式はその後の変化を示し、より周辺の建物にも及んだのではなかろうか。

#### 〔注目点５〕

「Ⅰ型式」の素弁十弁の軒丸瓦が飛鳥寺の創建瓦であるという。その理由として「出土総数の３０％をしめる」瓦であり、「主要建物に用いられている」からであるという。問題は「瓦の年代」を科学的（考古学的）に決めているのではなく出土数の多い瓦を「創建瓦」にしていることである。

## (8) 下層から出土した土器

飛鳥寺の下の包含層（上層、下層）から土師器、陶質土器が出土している。下層の土器は古墳時代のものであるという。上層の土器は蓋坏を代表的なものとし、陶質土器には壺、高坏などがある。この蓋坏の示す型式が飛鳥寺創建前であることは、陶質土器の編年の研究に一つのメルクマールを与えたこととなろう。

### 〔注目点6〕

飛鳥寺の下層から土器が出土した。飛鳥寺の創建前の土器である。「飛鳥寺の創建」は「596年」であるとしているから、この土器は「596年」以前の土器であるという。これは「陶質土器の編年の研究に一つのメルクマール（指標）を与えたこととなろう」と述べている。その予想通りにこの土器は「陶質土器の編年」の「定点（基準年）」として用いられるようになる。しかし「飛鳥寺の創建」は「672年～677年」である。「（陶質）土器の編年」は「約80年」も狂っている。

以上のように昭和31年～32年の「飛鳥寺第1次発掘調査」は多くの成果を収めた。しかし多くの問題を含んでいる。



## 2 土器の編年とその問題点

### (1) 田辺昭三氏の須恵器編年

考古学では「土器」が年代を決める重要な「物差し」になっている。したがって「土器の編年」は考古学ではもっとも重要な課題である。

田辺昭三氏は『須恵器大成』（角川書店、昭和五十六年）の中の「須恵器の編年と実年代」で「須恵器年表」を提示し、次のように述べている。

須恵器変遷の概略を述べてきたが、その中で基準資料として使ったのはほとんど陶邑窯の製品ばかりである。それは、須恵器生産の開始が一元的であり、陶邑窯とその周辺が最古の生産地であるとする私見にもとづいている。須恵器生産の地方へ拡散する時期がいつであれ、須恵器はまず阪南丘陵地帯で生産がはじまり、そこで成立展開した或る型式が地方の生産に及ぶ。陶邑窯が古墳時代を通して主導的な生産地であったことも考えあわせれば、如何なる地方の須恵器編年の場合も、陶邑窯における型式変遷を縦軸にすえ、これを基準として地域の特徴をとらえていくほかあるまい。 田辺昭三氏

田辺昭三氏はこのように述べて大阪府の「陶邑窯」を基準にした「須恵器の編年と実年代」を定めて「須恵器年表」（表 1）を作成している。

さらに続けて次のように述べている。

埼玉・稲荷山古墳からも須恵器が出土している。稲荷山古墳そのものが二つの主体部を持っているので、いずれの主体部に属するかは決定し難いが、その須恵器は高蔵四七型式の中でもやや古い型式的

特徴をもっている。鉄剣の製作年代を示す「辛亥年」を四七一年とすれば、高蔵四七型式は四七一年をさかのぼらず、また「辛亥年」を五三一年とすれば、高蔵四七型式を六世紀中葉頃まで下げて考えなくてはならない。現段階では、辛亥年を四七一年とする説にもとづいた年代観をとりたい。

六世紀代の資料としては、いま一つ、奈良・飛鳥寺創建前の土層中より発見された須恵器片がある。この須恵器は、高蔵四三型式に相当する特徴をもっているところから、高蔵四三型式を飛鳥寺の建立がはじまった五八七年の直前か、あるいはその少し前の年代とみることができよう。

田辺昭三氏

田辺昭三氏は、飛鳥寺の下層から出土した須恵器は陶邑窯の「高蔵四三型式」に相当するとして「高蔵四三型式（TK43）」は飛鳥寺の建立がはじまる587年の直前か、その少し前であろうとしている。

「高蔵四三型式（TK43）」の年代を決めるのに飛鳥寺の下層から出土した須恵器を「年代の定点」にしている。これが「大問題」である。

田辺昭三氏も「飛鳥寺＝法興寺」説であり、「飛鳥寺の創建」を法興寺の創建開始である「587年」にしている。そのため飛鳥寺の下層から出土した須恵器は「飛鳥寺の建立がはじまる587年の直前か、その少し前であろう」としている。田辺昭三氏の「須恵器の編年と実年代」は「飛鳥寺の創建＝596年」をもとにして作られている。

「飛鳥寺」は筑紫の元興寺を「672年～677年」の間に移築したものである。飛鳥寺の下層から出土した須恵器は「672年～677年」よりも前ということになる。田辺昭三氏の「高蔵四三型式（TK43）」の年代は「約80年」も早い年代になっている。これが現在でも遺跡から出土した土器の年代を決める「物差し」になっている。考古学の大問題である。

「須恵器編年」にはもう一つ中村浩氏の「陶邑古窯址群における須恵器編年」がある。Ⅰ－Ⅴ型式を設定してⅠ型式をさらに2－6段階に細分している。

田辺昭三氏の「須恵器年表」と、中村浩氏の「須恵器編年」が今でも「須恵器編年」の基準になっている。

(注記) 1961年に大阪府陶邑古窯址群の発掘調査が行われて我国最大規模の須恵器窯址であることが判明した。「須恵器年表」の中で「TK」とあるのは「高蔵窯」の略であり、「高蔵四七号窯」を「高蔵四七型式」とし、「TK四七」と略して書く。「MT」は「陶器山窯」であり、「ON」は「大野池窯」、「KM」は「光明池窯」の略である。

## (2) 田辺昭三氏の「須恵器年表」への疑問

田辺昭三氏の「須恵器年表」には二つの問題点がある。一つは、今見てきたように飛鳥寺下層から出土した土器の年代を決定するのに「飛鳥寺＝法興寺」として「法興寺の創建年代(596年)」を適用していることである。それにより須恵器の年代は約80年も早くなっている。

もう一つは、稲荷山古墳から出土した鉄剣の銘にある「辛亥年」から「高蔵四七型式」の年代を決めていることである。

田辺昭三氏は埼玉・稲荷山古墳から出土した須恵器を「高蔵四七型式の中でもやや古い型式的特徴をもっている」として、同じ稲荷山古墳から出土した鉄剣の銘「辛亥年」から「高蔵四七型式」の年代を決めている。田辺氏は「辛亥年」を「四七一年とする説にもとづいた年代観をとりたい」とし、「高蔵四七型式(TK47)は四七一年をさかのぼらず」としている。しかし「辛亥年」が「531年」であれば「TK47」は「六世紀中葉頃まで下げて考えなくてはならない。」とも書いている。同じ「TK47」で「60年」以上も違ってくる。

表 1 須恵器年表 (田辺昭三氏『須恵器大成』(角川書店))

| 期   | 西暦          | 型 式<br>(陶邑窯) | (陶邑窯)                | 地 方 窯       | 古墳・宮都他                   |
|-----|-------------|--------------|----------------------|-------------|--------------------------|
| I   | A.D.<br>400 |              |                      |             |                          |
|     |             |              |                      |             | ○ 大阪・履中陵古墳               |
|     |             | TK-73        |                      | ○ 大阪・一須賀2号窯 |                          |
|     |             | TK-216       |                      |             | ○ 大阪・応神陵古墳               |
|     |             | TK-208       | (ON-46) — 宮城・大蓮寺窯    |             | ○ 大阪・仁徳陵古墳               |
| II  |             | TK-23        | (MT-84) — 愛知・東山218号窯 |             | ○ 島根・金崎古墳                |
|     | 500         | TK-47        | (KM-1) — 島根・迫谷2号窯    |             | ○ 埼玉・稻荷山古墳               |
|     |             |              | ○ 島根・高畑窯             |             |                          |
|     |             |              | ○ 長野・松ノ山窯            |             |                          |
|     |             | MT-15        |                      |             | ○ 福岡・岩戸山古墳               |
| II  |             | TK-10        |                      |             |                          |
|     |             | TK-43        | ↑<br>(MT-85)<br>↓    |             | ○ 奈良・飛鳥寺                 |
|     | 600         | TK-209       |                      |             |                          |
|     |             |              | ○ 京都・幡枝窯             |             |                          |
| III |             | TK-217       | (TK-80)              | ○ 兵庫・庄慶山1号窯 |                          |
|     |             | TK-46        |                      |             | ○ 滋賀・近江京                 |
|     |             | TK-48        |                      |             | ○ 奈良・藤原京                 |
|     | 700         | MT-21        |                      |             | ○ 奈良・平城京                 |
|     |             |              | (KM-16)<br>(TK-53)   |             | ○ 国分寺・尼寺の造営<br>○ 地方官衙の整備 |
| IV  | 800         | TK-7         |                      |             | ○ 京都・長岡京                 |
|     |             | MT-83        |                      |             | ○ 京都・平安京                 |
|     |             |              |                      |             |                          |

\* 陶邑地区区分の略号 TK=高蔵 MT=陶器山 ON=大野池 KM=光明池

「辛亥年」は「531年」である（古代史の復元⑤『倭の五王と磐井の乱』）。田辺氏の「471年説」にもとづいた「須恵器年表」は誤りということになる。

ただし、田辺氏も述べているように稲荷山古墳には二つの主体部（墓）がある。さらに中心の主体部は未発掘であるという説もある。そうであれば三つの主体部があることになる。したがって稲荷山古墳から出土した須恵器と「辛亥銘」鉄剣の関係が明らかにならない限り、稲荷山古墳出土の須恵器から「高蔵四七型式（TK47）」に年代を与えることは出来ない。

### (3) 飛鳥寺下層出土土器に関する最近の研究

「飛鳥寺下層出土土器群とTK43型式」に対して重要な指摘がなされている。畑中英二氏は『飛鳥・白鳳の瓦と土器 一年代論』（帝塚山大学古代の土器研究会、1999年）の中で尾野善裕氏の論文を紹介している。

報告書（『飛鳥寺』第1回発掘調査報告書）作成時には飛鳥寺創建以前に出現した須恵器の最新型式を提示しようとする意図から、もっとも新しく見える個体を抽出した可能性があるという。加えてTK43型式の標式資料として提示されているTK43号窯跡出土の須恵器と比較すると、必ずしも同一とはい切れず、寧ろ杯身の立ち上がりの形状等に古い要素が見られるという。（中略）僅か一組の蓋杯の表面的な類似性だけを根拠にTK43型式の操業やTK43型式の開始が飛鳥寺創建より遡るとはいえず、これがもっとも新しく見える個体であるならば、寧ろ飛鳥寺創建後になる可能性を指摘できるという。 尾野善裕氏の論文を畑中英二氏が要約したもの

田辺昭三氏は「高蔵四三型式を飛鳥寺の建立がはじまった五八七年の直前か、あるいはその少し前の年代とみることができよう」としている。ところが

尾野善裕氏の論文では「寧ろ飛鳥寺創建後になる可能性を指摘できる」という。飛鳥寺の下層から出土した須恵器は「飛鳥寺の創建（596年）」より後になる可能性があるという。

飛鳥寺の下層から出土した須恵器が「法興寺の創建」である「596年」よりも後になるということになれば「飛鳥寺の創建＝法興寺の創建＝596年」説は崩れることになる。「飛鳥寺≠法興寺」となる。

「飛鳥寺≠法興寺」は考古学からも立証されようとしている。

#### (4) TK43号窯跡の年代

畑中英二氏は『飛鳥・白鳳の瓦と土器 一年代論一』所収の「陶硯からみたTK43号窯跡の年代観」で「TK43型式」の年代を次のように述べている。

TK43号窯跡からは2種類の陶硯が出土している。一つは圈足円形硯、一つは台の付く蹄足円形硯である。（中略）圈足円形硯については隋代を遡らず、台の付く蹄足円形硯については隋代末頃を遡らないことから、TK43号窯跡出土事例については、後者の年代をとって7世紀第一四半期頃を遡りうる上限とすることが出来る。（中略）現状では7世紀第一四半期頃がTK43号窯跡出土事例の生産年代の遡りうる上限であると考えるのが穏当ではないかと思われる。

畑中英二氏

「TK43号窯跡」の年代は「7世紀第1四半期」ころが遡りうる上限であるという。

「TK43型式」の年代を「飛鳥寺の建立がはじまった五八七年の直前か、あるいはその少し前の年代とみることができよう」としている田辺昭三氏の説は完全に否定されることになる。

飛鳥寺の下層から出土した土器が「7世紀第1四半期以降」ということになれば「飛鳥寺の創建」は「7世紀第1四半期以降」よりも後ということになる。「飛鳥寺＝法興寺」とし、「飛鳥寺の創建」を法興寺の創建である「596年」としてきた従来説は完全に否定される。「飛鳥寺≠法興寺」である。

「7世紀第1四半期以降」に飛鳥寺が創建されたとなれば飛鳥寺は「672年～677年」の間に移築したという私の説に一步近づいたことになる。

畑中英二氏の研究により、「飛鳥寺＝法興寺」説は完全に否定された。考古学の最近の研究により、飛鳥寺の創建（移築）は「672年～677年」である可能性がでてきた。

### 3 飛鳥寺の創建瓦の問題点

#### (1) 軒丸瓦の種類

「飛鳥寺の創建」は「土器」から「7世紀第1四半期以降」であることが判明した。さらにより正確な年代を知りたい。土器以外から「飛鳥寺の創建年代」を知ることはできないだろうか。それは「瓦」であろう。

瓦葺きの屋根は基本的には平瓦と丸瓦を組み上げていく。軒先は文様を付けた軒丸瓦・垂木先瓦で飾り、大棟には鴟尾や鬼瓦を用いて装飾性や荘厳さを高める。

軒丸瓦の文様は瓦工のグループや年代によって変化するという。軒丸瓦の「文様」は瓦の年代を知る重要な手がかりになっている。

最古の軒丸瓦の文様には「花組（桜組）」「星組」「雪組」と呼ばれる3種類がある。

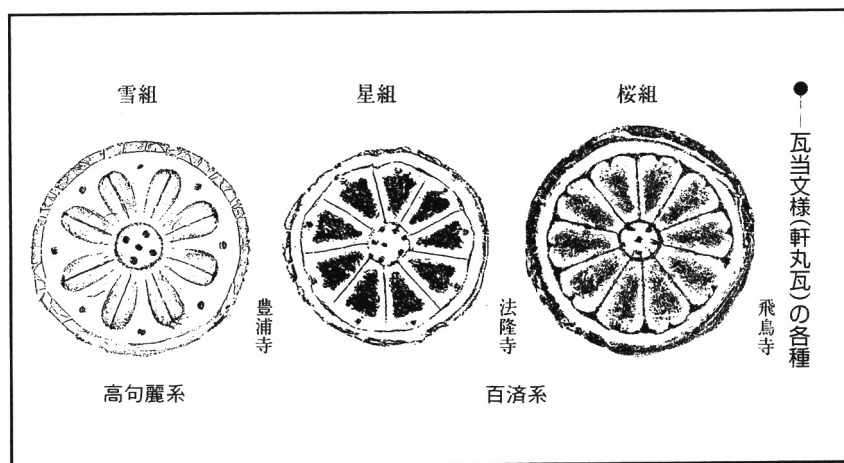
#### ○最古の軒丸瓦の種類

- 花組（桜組）…弁端切り込み型（桜の花弁のような切り込みがある）
- 星組 …角端点珠型（先端が角張り、その頂点に珠文がある）
- 雪組 …雪の結晶のような型（高句麗系ともいう）

（注記）「弁」は蓮華の花弁をいう。「十弁」とは花弁が10枚ある文様をいう。



図 3 軒丸瓦の花組・星組・雪組



## (2) 飛鳥寺の軒丸瓦

『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告）は飛鳥寺から出土した軒丸瓦を次のように分類している。

### ○飛鳥寺出土の軒丸瓦

- 「Ⅰ型式」…素弁十弁で弁端が桜花状を呈す。玉縁がつくられず行基葺に用いられたことを示している。出土総数の30%をしめ、主要建物に用いられている。
- 「Ⅲ—Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ型式」…ともに弁の先端が角張り、その先端に円点を附したもので、Ⅳ・Ⅴ型式は十一弁、Ⅶ・Ⅷ型式は九弁である。

『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告）

I・II・VI型式は蓮華の花弁の先端が桜花状を呈しており、「桜組」あるいは「花組」といわれている。

III—V・VII—X型式は花弁の先端が角張り、その先端に円点を附しており、「星組」といわれている。

飛鳥寺からは「雪組」の軒丸瓦は出土していない。

「I型式」は素弁が十弁あり、「桜組（花組）」を代表する軒丸瓦である。『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告書）は次のように書いている。

I型式が創建当時百済の瓦工の指導によって作られたもので、III型式はその後の変化を示し、より周辺の建物にも及んだのではなかろうか。VII以下の型式は、その後の小補修に差し替えられたものであることを数量の上でも示している。

『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告）

「I型式（花組）」が飛鳥寺の創建時の軒丸瓦であるという。「III型式（星組）」はその後の変化を示し、と書いている。「花組（桜組）」が創建瓦であり、「星組」は創建以後の瓦であるという。

○飛鳥寺の創建瓦 （『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告書）より）

- 創建瓦 …… I型式（花組、桜組ともいう）
- 創建以後の瓦…… III型式（星組）、その他

### (3) 「花組」「星組」の年代

『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告書）では「I型式（桜組）」が飛鳥寺の創建軒丸瓦であり、「III型式（星組）」はその後の変化を示しているという。

ところが最近の研究では「Ⅰ型式（花組）」と「Ⅲ—Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ型式（星組）」の二つが飛鳥寺の創建瓦であるという。花谷浩氏は『飛鳥・白鳳の瓦と土器』（帝塚山大学考古学研究所 古代の土器研究会、1999年）の中の「畿内の飛鳥・白鳳時代の瓦とその年代」で次のように述べている。

（飛鳥寺の）創建の軒丸瓦は、花組（Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ）と星組（Ⅲ—Ⅴ・Ⅶ—Ⅹ）。出土数からみて、花組Ⅰ型式と星組Ⅲ・Ⅷ型式が主要型式。花組Ⅰ型式は、瓦範の彫り直しがあり、Ⅰa、Ⅰb、Ⅰcに細分。Ⅰaは中心伽藍、Ⅰbは大垣に多い。Ⅰcは極少数。（中略）花組と星組とでは、軒丸瓦の紋様だけでなく、瓦当の作り方や丸瓦との接合技法、丸瓦・平瓦の製作技法など瓦作り全般に明確な違いがある。これは工人の違いと認めてよく、両者の間に技術交流や花組から星組への技術変化は認められない。

中心伽藍からの出土状況から、塔・金堂＝花組、中門・回廊＝星組、の使い分けがみてとれる。Ⅰ型式bは、北面大垣など周辺部での出土が目立つ。（中略）

飛鳥寺伽藍中枢（塔金堂院）の素弁蓮華紋軒丸瓦、花組Ⅰ型式aと星組Ⅲ型式・Ⅷ型式aは、ほとんど時を同じくして生産された。その生産と供給年代は、造営が開始された崇峻元年（588年）から塔に露盤をあげた推古四年（596年）の間に求めることができる。

花谷浩氏

花谷浩氏は飛鳥寺の創建瓦は花組（Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ）と星組（Ⅲ—Ⅴ・Ⅶ—Ⅹ）であるという。しかもほとんど同時期に生産されたという。その時期は「588年～596年」の間であるという。

花谷浩氏も「飛鳥寺の創建」を法興寺の創建である「588年～596年」にしている。そのため飛鳥寺の創建瓦の年代は「588年～596年」になっている。

○「飛鳥寺の創建瓦」 （花谷浩説）

- 創建の軒丸瓦は花組（Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ）と星組（Ⅲ—Ⅴ・Ⅶ—Ⅹ）
- 花組Ⅰ型式aと星組Ⅲ型式・Ⅶ型式aは、ほとんど時を同じくして生産された。
- その生産と供給年代は、造営が開始された崇峻元年（588年）から塔に露盤をあげた推古四年（596年）の間に求めることができる。

花谷浩氏は、飛鳥寺の創建瓦である「花組」「星組」は「時を同じくして生産された」という。ところが花谷浩氏は「花組と星組とでは、軒丸瓦の紋様だけでなく、瓦当の作り方や丸瓦との接合技法、丸瓦・平瓦の製作技法など瓦作り全般に明確な違いがある。これは工人の違いと認めてよく、両者の間に技術交流や花組から星組への技術変化は認められない。」と述べている。

飛鳥寺の創建瓦は「製作技法など瓦作り全般に明確な違いがある」二組の瓦工グループが作っていることになる。しかし一つの寺院の軒丸瓦を紋様や製作技法の異なる二組の瓦工に造らせるだろうか。

〔花谷浩説への疑問〕

- 飛鳥寺の創建瓦を「花組」「星組」の二種類にしていること
- 「花組」「星組」はほとんど同時期に生産されているとしていること
- 「飛鳥寺＝法興寺」を前提にして創建瓦の年代を「588年～596年」にしていること。すなわち「瓦の年代」を文献から求めていること。

花谷浩氏もやはり「飛鳥寺＝法興寺」説をとっている。「瓦の年代」は間違っていると言える。

「花谷浩説」にはこのような問題点がある。「飛鳥寺の創建瓦」についてさらに詳しく調べる必要がある。

## 4 飛鳥寺と豊浦寺の創建

### (1) 飛鳥寺と同範の軒丸瓦

「飛鳥寺の創建年代」を「考古学」から知るために飛鳥寺の下層から出土した土器や飛鳥寺の瓦について調べてきた。しかしどちらも「飛鳥寺＝法興寺」として「飛鳥寺の創建年代」を文献から「596年」にしている。間違った解釈により「飛鳥寺の年代」が決められている。これでは「考古学」から「飛鳥寺の創建年代」を知ることはできない。

「飛鳥寺の瓦」から「飛鳥寺の創建年代」を知ることはできなかったが、飛鳥寺の瓦と関係のある寺院の創建年代を調べれば、それから「飛鳥寺の創建年代」を知ることができるのではないだろうか。そう考えて飛鳥寺と関係のある寺院について調べることにした。

岡本東三氏は『日本史リブレット 古代寺院の成立と展開』（山川出版）の中で飛鳥寺と同範の軒丸瓦を持つ寺院を列挙している。

（飛鳥寺の）桜組と同範関係をもつ寺院は、豊浦寺をはじめ和田廃寺・古宮遺跡（大和）、高麗寺（山背）、衣縫廃寺・船橋廃寺（河内）、姫寺廃寺・海龍王寺（大和）などである。

星組と同範関係をもつ寺院は豊浦寺をはじめ奥山廃寺・雷廃寺・上増遺跡・石神遺跡・斑鳩寺・只塚廃寺（大和）、四天王寺（摂津）などである。

中房に一十四の連子（れんじ）を配する星組の一種は、飛鳥寺で用いられた後、豊浦寺で一十六に改範され、さらに斑鳩寺の創建瓦（A）に用いられている。

もう一種の斑鳩寺の創建瓦（B）はのちに四天王寺に用いられるものであるが、付近の飛鳥池東方遺跡からも出土している。

岡本東三氏

飛鳥寺の花組（桜組）と同範関係をもつ寺院は豊浦寺をはじめ、和田麿寺等があるという。また飛鳥寺の星組の瓦を焼いた瓦範は豊浦寺で使われ、さらに斑鳩寺でも使われているという。飛鳥寺を創建した後に豊浦寺を創建している。

重要なことは「豊浦寺」は飛鳥寺の「花組」、「星組」ともに関係があるということである。

岡本東三氏はさらに次のように述べている。

ほぼ同時につくられる豊浦寺は飛鳥寺の百済系桜組と星組ともに同範関係をもつが、主に百済系桜組が使われる。また、飛鳥寺にはない高句麗系軒丸瓦（雪組と呼ぶ）が出土する。四種類があるが、主なものは宇治隼上り（はやあがり）瓦窯の供給品である。奥山麿寺・和田麿寺・古宮遺跡に同範例がある。

豊浦寺への供給が終わると隼上り瓦窯の範型は北野麿寺所用の幡枝（はたえだ）元稲荷瓦窯と四天王寺所用の楠葉（くずは）平野山瓦窯に移されて、素弁百済系とともに生産されている。

こうした飛鳥寺・豊浦寺との同範関係が、ただちに同時代の造営を意味するものではないが、七世紀第Ⅰ期中におさまると考えられる。

岡本東三氏

「豊浦寺の創建」について「飛鳥寺・豊浦寺との同範関係が、ただちに同時代の造営を意味するものではないが」という前提を付けて、豊浦寺の創建は飛鳥寺の創建に近いから「七世紀第Ⅰ期（601—625）中におさまると考えられる」と述べている。

岡本東三氏も飛鳥寺の創建を法興寺の創建である「596年」にしている。「豊浦寺の創建年代」は「飛鳥寺の創建に近い」から「七世紀第Ⅰ期（601—625）中」にしている。「豊浦寺の創建年代」を「飛鳥寺の創建＝596年」を前提にして決めている。したがって「豊浦寺の創建年代」は間違っていることになる。

ただし飛鳥寺が造られた後に豊浦寺が造られていることが瓦の同範関係から明らかになった。豊浦寺の創建年代が判明すれば飛鳥寺の創建年代が判明するかもしれない。

## (2) 「豊浦寺」とは

「飛鳥寺の創建年代」を知るために「豊浦寺の創建年代」を調べてみたが、考古学では「豊浦寺の創建年代」を「飛鳥寺の創建年代」から推定している。しかも「飛鳥寺＝法興寺」として飛鳥寺の創建を「596年」にして「豊浦寺の創建」は「七世紀第Ⅰ期（601—625）中におさまると考えられる」としている。

これでは「考古学」から「豊浦寺の創建年代」を知ることはできない。そこで文献から調べることにした。

田村皇子（舒明天皇）と山背大兄皇子は天皇位を争う。その中に豊浦寺が出てくる。

（舒明）即位前紀、吾、曾（かつて）、叔父の病を將に訊ねるとき京へ向かい、而して豊浦寺に居す。『日本書紀』

「吾」とは山背大兄皇子であり、「叔父」は蘇我蝦夷である。

山背大兄皇子は厩戸皇子（聖徳太子）の長子である。「605年」に厩戸皇子は肥前の飛鳥から大和の斑鳩に移る。山背大兄皇子は斑鳩に住んでいる。



「京」は「上宮王家」の本拠地である「肥前の飛鳥」である。「京へ向かう」とは大和の斑鳩から「肥前の飛鳥」へ向かうことである。

「豊浦寺」は肥前（佐賀県）の三根郡葛城の「豊浦」に創建される（「古代史の復元⑥『物部氏と蘇我氏と上宮王家』」）。

「豊浦」は推古天皇の「豊浦宮」があったところである。600年ころに推古天皇は蘇我氏の小治田の地と豊浦の地を交換する。蘇我蝦夷はその豊浦に住み、「豊浦大臣」と呼ばれる。

（蘇我）馬子宿禰の男、（蘇我）蝦夷宿禰は葛城縣豊浦里に家をれり。  
故、名づけて豊浦大臣と曰う。 『紀氏家牒』

蘇我蝦夷は「葛城縣豊浦里」に住んでいるので「豊浦大臣」というとある。「葛城縣豊浦里」となっている。「葛城」の中に「豊浦」がある。「葛木の豊浦」である。肥前の「三根郡葛木の豊浦」である。「大和の豊浦」は高市郡にある。葛城にあるのではない。

『日本書紀』にも「豊浦」は次のように出てくる。

- （推古）即位前紀（592年）十二月、皇后、豊浦宮に於いて天皇位に即く。
- （推古）十一年（603年）十月、（推古天皇）小墾田宮に遷る。
- （推古）十八年（610年）十月、蘇我豊浦蝦夷臣
- （舒明）八年（636年）七月、豊浦大臣……
- （皇極）三年（644年）三月、豊浦大臣…… 『日本書紀』

「603年」に推古天皇は肥前の豊浦宮から肥前の小墾田宮へ遷る。「610年」に蘇我蝦夷は「豊浦蝦夷臣」と呼ばれている。その後も「豊浦大臣」として出てくる。

蘇我蝦夷は「610年」ころから肥前の「三根郡葛木の豊浦」に住み、「645年」の「乙巳の変（大化改新）」まで肥前の「三根郡葛木の豊浦」に住んでいる。「乙巳の変（大化改新）」は肥前の飛鳥で起きている（「古代史の復元⑥『物部氏と蘇我氏と上宮王家』」）。

「629年」に山背大兄皇子は「昔、叔父（蘇我蝦夷）の病気を見舞いに京（肥前の飛鳥）へ行き豊浦寺に泊まった」ことを述べている。「豊浦寺」は蘇我蝦夷が居る肥前の「三根郡葛木の豊浦」にある寺である。

629年より以前のことである。「豊浦寺」は「629年」以前には創建されている。

#### ○豊浦寺の創建

- 「629年以前」に肥前の「三根郡葛木の豊浦」（今の北茂安町東尾）に創建される

その後「豊浦寺」は移築される。天武天皇が崩御したとき「小墾田豊浦寺」で無遮大会を行っている。

（持統）称制前紀、朱鳥元年（686年）十二月、天淳中原瀛真人天皇（天武天皇）の奉為に無遮大会を五寺、大官・飛鳥・川原・小墾田豊浦・坂田に設ける。  
『日本書紀』

天武天皇は大和の飛鳥浄御原宮で「686年9月」に崩御する。「12月」に「小墾田豊浦寺」で無遮大会を行っている。686年には「（小墾田）豊浦寺」は大和の飛鳥にある。

「豊浦寺」は「629年—686年」の間に肥前から大和の飛鳥へ移築されている。おそらく天武天皇が移築したのであろう。

天武天皇が移築したとすれば「672年」の「壬申の乱」の後であろう。「豊浦寺」は672年の「壬申の乱」から天武天皇が崩御する686年の間に肥前から大和へ移築されている。

天武天皇は五寺（大官・飛鳥・川原・小墾田・豊浦・坂田）の内、「大官大寺（百濟大寺）」と「飛鳥寺（元興寺）」を九州から移築している。豊浦寺も天武天皇が移築しているのであろう。

### ○元興寺（飛鳥寺）と豊浦寺の移築

- 元興寺の移築 672年—677年
- 豊浦寺の移築 672年—686年
- 移築したのは天武天皇

### ○豊浦寺の変遷

- 「豊浦寺」 ……肥前の三根郡葛木の豊浦に創建される  
(629年より以前)
- 「小墾田豊浦寺」 ……肥前の豊浦寺を大和の小墾田に移築

これが文献から得られる「豊浦寺」である。

### (3) 宇治隼上り瓦窯跡と出土瓦

「豊浦寺の創建」は「629年以前」ということは文献から分かった。しかし「豊浦寺の創建年代」はもっと絞れないだろうか。

宇治市の「隼上り（はやあがり）瓦窯」で焼かれた瓦は「豊浦寺」の創建瓦であるという。隼上り瓦窯の操業年代が分かれば「豊浦寺の創建年代」が判明する。

宇治市教育委員会は1989年に『史跡 隼上り瓦窯跡』（平成元年）を出版している。その「はじめに」で、「ここで焼かれた瓦は7世紀初頭に蘇我氏が飛鳥に建立した豊浦寺で使われていることが判明しました」と書いている。豊浦寺は7世紀初頭頃に大和の飛鳥に創建され、瓦は隼上り瓦窯で焼かれたという。したがって「隼上り瓦窯」の操業は7世紀初頭であるという。

しかしこれは問題である。「豊浦寺」は肥前の三根郡葛木の豊浦に創建されている。瓦は北部九州で焼かれているはずである。「豊浦寺」の創建瓦を宇治市の隼上り（はやあがり）瓦窯で焼くはずがない。

隼上り瓦窯で焼いた瓦が「豊浦寺」で使われているというのは大和の「小墾田豊浦寺」のことであろう。「小墾田豊浦寺」は肥前の「豊浦寺」を「672年—686年」の間に移築している。隼上り瓦窯で焼かれた瓦は「672年—686年」の移築の時に使われたのではないだろうか。「宇治の隼上り瓦窯跡」について詳細に調べる必要がある。

『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』（宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第3集、宇治市教育委員会、1983年）は隼上り瓦窯から出土した軒丸瓦について次のように書いている。

#### A 軒丸瓦

軒瓦は軒丸瓦のみ認められ、2系統5型式6種存在する。2系統とは所謂高句麗様式と呼ばれる第1系統と、百濟様式と呼ばれる第2系統とであり、第1系統が窯の成立からその廃絶まで文様の主流をなし、当瓦窯跡の大きな特色となっている。（中略）

A型式…第1系統に属するもので、その中でも最古型式の特徴をもつ。A1は京都国立博物館蔵豊浦寺出土例、飛鳥平吉遺跡出土例と同範であり、A2は天理大学付属天理参考館蔵豊浦寺出土例と同範である。

B型式…第1系統に属する。天理大学付属天理参考館蔵豊浦寺出土例、平吉遺跡出土例と同範である。

C型式…第1系統に属する。奈良県立橿原考古博物館蔵豊浦寺出土例と同範。

D型式…第1系統に属する。幡枝瓦窯出土例、北野麿寺出土例と同範ではあるが、幡枝瓦窯出土例、北野麿寺出土例は共に周縁を持たないことを特色としているのに対し、当例は例外なく周縁を有す。

E型式…当瓦窯出土5型式中、唯一の第2系統。2個体出土している。同范例に平吉遺跡出土例がある。『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』

第1系統は「高句麗様式」とあり、「雪組」のことである。第2系統は「百濟様式」であり、「花組」である。

A—Eの5型式の中でA—Dの4型式は雪組であり、「第1系統（雪組）が窯の成立からその廃絶まで文様の主流をなし、当瓦窯跡の大きな特色となっている」とある。隼上り瓦窯は「雪組」主体の窯である。

飛鳥寺からは雪組の瓦は出土していない。「隼上り瓦窯」と「飛鳥寺」は直接には関係がない。

#### (4) 隼上り瓦窯跡と「須恵器の編年」

『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』は須恵器の編年について次のように述べている。

##### A 須恵器の編年

今回出土した須恵器は、従来より7世紀前半期とされてきたものばかりである。ここでは、出土した須恵器の中で窯内に遺棄された一括遺物の特に杯に着目し、その変化を第1—4段階に編年し、各段階の検討を行う。

第1段階…当段階の指標となるべき一括遺物はない。しかし、後述する第2段階の杯Aよりも型式的に先行するものが1・2号窯灰原より出土しており、これらをもって第1段階を型式的に設定した。

(中略)

この大形の杯Aを出土する小墾田宮推定地の溝SD050、大阪府陶邑古窯群TK217号窯、京都市幡枝瓦窯跡ではこれに混じって少量の杯Bの出土が確認されているが、当瓦窯跡では第3段階まで待たねば杯Bの出現が認められず、上記遺跡と異なった様相が指摘できる。当段階は飛鳥Ⅰ、陶邑第Ⅱ型式第5段階後半に相当する。

第2段階…2号窯最終床面遺存遺物をその指標とする。杯はAだけである。(中略)所謂古墳時代伝統的杯の最末期型式であり、陶邑第Ⅱ型式第6段階に相当する。(中略)類例は前述の陶邑古窯址群TK217号窯、幡枝瓦窯跡に認められる。

第3段階…3号窯最終床面遺存遺物をその標識とする。従来の杯Aの他に、杯Bと杯Cが出現しており、その特色となっている。(中略)(杯Bの)蓋については径が13cm前後となる。(中略)口径13cm前後の杯Bは飛鳥では小墾田宮推定地の溝SD050で径11cmの杯身Aと伴出しており、当瓦窯跡における状況とは様相を異にしている。径が9cm程の杯A身と伴う杯B蓋は、飛鳥では坂田寺跡の池SG100出土例のように口径10cm程のものであり、当瓦窯では第4段階にならなければ一般化しないものである。このような伴出関係の微妙なずれを問題にしないならば、杯Aと杯Bの比率は飛鳥Ⅱに類似している。

第4段階…1号窯最終床面遺存遺物をその標識とする。杯A・Bともに存在するが、杯Bが主流となる。(中略)口径が10cm程の杯Bは飛鳥Ⅱに比定されている。

以上、第1―第4段階までの須恵器変化を概観した。次にそれぞれの段階の示す年代を簡単にふれておく。

7世紀の土器を飛鳥Ⅰ—Ⅴの5期区分した『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱでは、飛鳥Ⅰを7世紀の第1四半期、飛鳥Ⅱを第2四半期、飛鳥Ⅲを第3四半期、飛鳥Ⅳを第4四半期、飛鳥Ⅴを7世紀末から8世紀初頭と位置付けており、これにしたがえば、第1段階を7世紀前後、第3・4段階に概ね7世紀第2四半期の年代をあたえられる。しかし、この年代観については最近白石太一郎氏より新しい意見が発表されている。氏によれば、第1段階を7世紀第2四半期、第4段階が第3四半期となり、若干降ることとなる。

『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』

「今回出土した須恵器は、従来より7世紀前半期とされてきたものばかりである」と書いている。従来の「須恵器編年」を用いて年代を決めている。これは大問題である。「須恵器編年」は「約80年」も早くなっている。

従来の「須恵器編年」により、「隼上り瓦窯跡の第1段階は7世紀前後」、「第3・4段階は7世紀第2四半期」ころであるとしている。「須恵器編年」により「隼上り瓦窯跡」の年代が決められている。

「須恵器編年」は「約80年」も古く編年されている。「7世紀前後」とあるのは「7世紀後半—末」頃になるのではないだろうか。

宇治市教育委員会は1989年に『史跡 隼上り瓦窯跡』（平成元年）を出版している。そこでは「須恵器の編年」を変更している。報告書では第1段階—第4段階に区分していたが、今度は「古段階」「中段階」「新段階」の3段階にしている。「古段階」を「605年前後」に、「新段階」を「635年前後」に比定している。年代は変更していない。そして「ここで焼かれた瓦は7世紀初頭に蘇我氏が飛鳥に建立した豊浦寺で使われていることが判明しました」と書いている。

隼上り瓦窯跡の操業開始を「7世紀初頭（605年前後）」にしているのは飛鳥寺の創建が法興寺の創建である「596年」として、豊浦寺の創建は飛鳥

寺より後であるから「10年後」の「605年」にしているのであろう。「605年」は根拠のない推定年代である。

飛鳥寺は元興寺である。元興寺の創建は「609年」である。豊浦寺はその後に創建されるから「豊浦寺の創建」は「610年以降」になる。

## (5) 「隼上り瓦窯跡」と豊浦寺

畑中英二氏は『飛鳥・白鳳の瓦と土器 一年代論—』（帝塚山大学古代の土器研究会、1999年）の中の「近畿地方の飛鳥・白鳳時代土器編年研究と問題点」で隼上り瓦窯跡出土土器群について次のような指摘をしている。

### 2. 2. 1 隼上り瓦窯跡出土土器群を巡る理解

隼上り瓦窯跡は1982年に宇治市教育委員会によって発掘調査が行われ、新事実を提供した。中でも7世紀前半代と考えられる須恵器の一群と、豊浦寺の創建瓦と考えられていた所謂豊浦寺式軒瓦がともに生産されていたことが判明したからである。（中略）隼上り瓦窯跡の調査によって得られた資料が、7世紀第1四半期を中心とする時期の所産である可能性が高まり、それらが年代の定点資料となっていくた。（中略）

豊浦寺の創建にあたって、用いられたのが所謂豊浦寺式瓦であると考えられてきたわけであるが、豊浦寺そのものの発掘調査の進捗に伴って状況が変化していくた。1957年に金堂や塔などが（奈良県教委1958）、1980・85年に講堂（藤原調査部1981、藤原調査部1986）、1993年に金堂が再調査（清水1995）されているが、この内、構造の明らかとなった金堂及び講堂からは飛鳥寺式軒瓦が主体的に出土し、所謂豊浦寺式軒瓦は主体的に出土していないことが判明した。（中略）



豊浦寺の造営と、所謂豊浦寺式瓦とは一旦は切り離して考えることが必要ではないだろうか。 畑中英二氏

隼上り瓦窯跡は「7世紀前半代と考えられる須恵器の一群と、豊浦寺の創建瓦と考えられていた所謂豊浦寺式軒瓦をともに生産している」ので隼上り瓦窯跡の年代は「7世紀第1四半期」とされ、それが「年代の定点資料」になっていったという。「隼上り瓦窯跡の年代」が他の遺跡の年代を決める「物差し（基準）」になっているという。恐ろしいことである。

発掘調査が進むに連れて「（豊浦寺の）金堂及び講堂からは飛鳥寺式軒瓦が主体的に出土し、所謂豊浦寺式軒瓦（雪組）は主体的に出土していないことが判明した」とある。

隼上り瓦窯跡で造られた瓦（雪組）は豊浦寺の中心伽藍には使われていないことが判明した。「隼上り瓦窯跡」で焼いた瓦は「豊浦寺の創建」とは関係がないということになる。畑中英二氏は「豊浦寺の造営と、所謂豊浦寺式瓦とは一旦は切り離して考えることが必要である」と指摘している。

## (6) 隼上り瓦窯跡の編年の問題点

畑中英二氏は続けて隼上り瓦窯跡の編年について次のような指摘をしている。

### 2. 2. 2 隼上り編年案資料操作上の問題点

結論的にいうと、現在公表されている隼上り瓦窯跡出土資料を用いた編年案については、大きく2点の問題があると考えている（畑中1997a、1997c）。

一つは、構造から見た操業理解に関する問題であり、一つは遺構との関係が遊離した「型式論」先行の資料操作に関する問題である。

(中略)

## 2. 2. 3 豊浦寺（隼上り瓦窯跡）出土土器群を巡る問題点

以上のことから、現状の資料を見る限りでは豊浦寺と隼上り瓦窯跡の関係は必ずしも明らかではないことが理解でき、少なくとも7世紀第1四半期に遡る操業を想定することは非常に困難となった。付言すると、現状の資料による限りでは、豊浦寺と隼上り瓦窯跡との関係のみで、年代論を展開していくことは絶望的であるといわざるを得ない。

なお、隼上り瓦窯跡で出土している須恵器類の内、杯Gについてのみに注目すると、飛鳥地域での現状の資料をみる限りでは、640年にほど近い頃から出現するとみて大過無い。隼上り瓦窯跡の資料もその時期を現時点での遡りうる上限と考えることが妥当である。

畑中英二氏

「豊浦寺と隼上り瓦窯跡との関係のみで、年代論を展開していくことは絶望的である」という。そして隼上り瓦窯跡の操業開始の年代は7世紀第1四半期に遡ることは想定できないとし、「須恵器の杯G」から見る限り、「640年ころが遡りうる上限であろう」という。

隼上り瓦窯跡の操業年代は従来言われていた「605年」から「640年以降」に修正されることになる。

### ○隼上り瓦窯跡の操業年代

#### ■ 隼上り瓦窯跡の操業年代 640年以降～

従来は、豊浦寺の創建は「7世紀初頭」であり、創建瓦は隼上り瓦窯から供給されているので隼上り瓦窯跡の操業年代は「605年」ころであるとしてき

た。しかし最近の研究により、隼上り瓦窯跡の操業年代は「640年ころが遡りうる上限である」という。

隼上り瓦窯跡で焼いて「小墾田豊浦寺」に供給されたのは「豊浦寺式軒瓦（雪組）」である。「雪組」は「豊浦寺」を肥前から大和の小墾田に移築したときに隼上り瓦窯跡で焼いて供給したのではないだろうか。移築の時期は「672年～686年」である。隼上り瓦窯跡の操業年代は「640年以降」であるという。移築の時期（672年～686年）に近い。

## (7) 豊浦寺の創建瓦

『古代瓦の研究 I』（奈良国立文化財研究所、2000年）中の「3 飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」で花谷浩氏は豊浦寺の創建瓦について次のように述べている。

### C 豊浦寺の創建瓦

（豊浦寺の）金堂の創建軒丸瓦は、星組の豊浦寺Ⅱ型式A b（＝飛鳥寺Ⅲ b）とⅡ型式B（＝飛鳥寺Ⅷ）。（中略）

I 型式A a（＝飛鳥寺Ⅰ型式a）・Ⅱ型式D（＝飛鳥寺Ⅶ）を含めて、飛鳥寺出土品と胎土・焼成・製作技法に違いがなく、飛鳥寺星組の瓦を豊浦寺金堂造営に供給したとみてよい。（中略）ごくわずかなI 型式A aを除くと、豊浦寺金堂の創建瓦は星組の瓦で構成されている。（中略）

Ⅱ型式B bは、その後、斑鳩寺の金堂造営に使用された。

花谷浩氏

豊浦寺の金堂の創建軒丸瓦は、星組の豊浦寺Ⅱ型式A b（＝飛鳥寺Ⅲ b）と星組のⅡ型式B（＝飛鳥寺Ⅷ）であるという。豊浦寺の金堂の創建瓦は「星組」である。

飛鳥寺（元興寺）も、豊浦寺も北部九州に創建されている。飛鳥寺（元興寺）の創建瓦を焼いた後に豊浦寺の創建瓦を焼いている。豊浦寺の創建瓦は「飛鳥寺Ⅲ b」であるという。「b」は瓦範に傷ができて彫り直しをしたものである。飛鳥寺の瓦を生産して傷が付いた瓦範を彫り直して豊浦寺の瓦を焼いている。豊浦寺の創建が飛鳥寺（元興寺）よりも遅いことは瓦が証明している。

飛鳥寺は元興寺であり、元興寺の創建は「609年」である。豊浦寺の創建は「610年」以降である。

豊浦寺は「610年～628年」の間に肥前に創建されて、大和に移築される。そのとき金堂と講堂以外の建物は新しく造っている。その瓦は「雪組」である。宇治市の隼上り瓦窯跡で焼かれた瓦である。

「豊浦寺の変遷」は次のようになる。

#### ○豊浦寺の創建と移築

- 元興寺は「609年」に筑紫に創建される。創建瓦は「星組」。
- 「609年」に元興寺が完成すると次に豊浦寺の創建瓦（星組）を焼いている。  
豊浦寺の創建は「610年～628年」の間である。
- 天武天皇は「672年—686年」の間に豊浦寺を大和へ移築する。「小墾田豊浦寺」である。
- 大和に移築したとき宇治市の隼上り瓦窯跡で「雪組」の瓦を焼いて金堂・講堂以外の建物に葺いた。

豊浦寺の金堂と講堂は九州から移築している。そのため豊浦寺の金堂・講堂は筑紫に創建された「元興寺（飛鳥寺）」の創建瓦と同じ「星組」である。

ここでも「考古学の問題点」が浮き彫りにされた。『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』は「今回出土した須恵器は、従来より7世紀前半期とされてきたものばかりである」と書いている。「須恵器の編年」が隼上り瓦窯跡の年代を狂わせている。「須恵器の編年」はやはり「考古学の大問題」である。

## 第5章 飛鳥寺周辺の発掘調査

文献から求めた「飛鳥寺の創建（移築）年代」を考古学から検証したいと考えて飛鳥寺や豊浦寺について調べてきた。最近の考古学の研究により、飛鳥寺の下層から出土した土器は「596年以前」ではなく、「7世紀第1四半期以降」であることが判明した。飛鳥寺の創建（移築）は「7世紀第1四半期以降」になる。

「飛鳥寺＝法興寺」説はこれにより完全に否定された。「飛鳥寺≠法興寺」である。私の「飛鳥寺≠法興寺」説は最近の考古学の研究により立証されたとと言える。

しかし問題はまだ残っている。「飛鳥寺の創建（移築）」の正確な年代はまだわかっていない。「飛鳥寺」は「672年～677年」の間に筑紫の元興寺を移築したものである。それを考古学から証明できないのだろうか。

幸い飛鳥寺周辺の発掘調査は盛んに行われている。飛鳥寺周辺の発掘調査から飛鳥寺の正確な創建（移築）年代を知る手がかりが得られるのではないだろうか。

## 1 飛鳥寺周辺の調査

### (1) 飛鳥寺の北側の調査

飛鳥寺の「北側」の発掘調査から見ていこう。発掘調査は昭和52年に行われている。『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 8』（昭和53年4月、奈良国立文化財研究所）は概略次のように書いている。

○調査地域 飛鳥寺安居院（飛鳥大仏）の北方約220mの地点

- 東西方向に走る掘立一本柱の塀（SA500）を検出した。柱間は2.66m等間隔である。
- SA500の北に沿う幅約2.4m、深さ約1mの東西溝（SD501）を検出した。
- SA500の南約9mの位置にある内濠（SD503）を検出した。
- 塀SA500と溝SD501は位置関係や出土瓦などから飛鳥寺の北を画する施設と考えられる。
- 溝SD501からは炭化物に混じって多量の瓦や土器が出土した。軒丸瓦では、飛鳥寺創建瓦のうち、中房周縁の圈線が突出する単弁10弁蓮華文軒丸瓦が7割を占め、ついで奈良時代に属する複弁8弁素文縁軒丸瓦が目立つ。
- 塀SA500と飛鳥寺南門との心々距離は約293m、石敷広場までの間は約324mを測る。

『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 8』（昭和53年4月）

「軒丸瓦では、飛鳥寺創建瓦のうち、中房周縁の圈線が突出する単弁10弁蓮華文軒丸瓦が7割を占める」とある。「単弁10弁蓮華文軒丸瓦」とは「I型式（花組）」であり、「中房周縁の圈線が突出する」とあるのは瓦範に傷が生じたので彫り直しをした「I型式b」である。飛鳥寺の創建瓦「I型式a」よりも新しい瓦である。

飛鳥寺の北220mにある溝SD501から「I型式b」の瓦が出土している。

（注記）考古学では検出された遺構の種類を記号で区別している。

「SA」は塀、「SB」は建物、「SD」は溝、「SE」は井戸である。

昭和57年にその東の地点の調査が行われた。『飛鳥・藤原宮発掘調査概報13』（昭和58年4月、奈良国立文化財研究所）は次のように書いている。

○調査地域 飛鳥寺東北隅、昭和52年調査地の東100m

■ 検出した主な遺構は、東西塀SA500、南北塀（SA600）、東西溝SD503、南北溝（601）、東西溝（602）、土壇（SK605、606、607）、掘立柱建物（SB608）、南北塀（SA630）、斜行溝（SD603、604）などである。

■ 東西塀SA500は（東で）南折し、南北塀SA600に連続する。

■ 東西溝SD503（内濠）は東で南に折れ、南北溝SD601に連なる。

堆積土からは6世紀末—7世紀初頭の須恵器坏身片、赤焼きの桶巻き作り平瓦片が少量出土した。

○まとめ

これらの築造年代とその存続期間については、SD503出土の土器や瓦から飛鳥寺創建時まで遡ることは明らかである。



この「東北隅の調査」では「東西溝SD503（内濠）の堆積土からは6世紀末—7世紀初頭の須恵器坏身片、赤焼きの桶巻き作り平瓦片が少量出土した」とある。「まとめ」には「SD503出土の土器や瓦から飛鳥寺創建時まで遡ることは明らかである」と書いている。

飛鳥寺の「東北隅の調査」で検出した「東西溝SD503（内濠）」は「6世紀末—7世紀初頭」であり、飛鳥寺創建時（596年）のものであるという。「飛鳥寺の創建」をここでも法興寺の創建である「596年」にしている。やはり「飛鳥寺＝法興寺」説である。

「問題」は「6世紀末—7世紀初頭の須恵器の坏身片」としていることである。「須恵器の編年」から年代を求めている。「隼上り瓦窯跡」と同様に「約80年」も早い年代になっているのではないだろうか。

これについては後に検討する。

## (2) 飛鳥寺の南側の調査

昭和31年の第1次発掘調査により、飛鳥寺の南門の南に石敷広場が検出された。その東方約40mの地域を「東北隅の調査」と同じ年に発掘調査している。

『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 13』（昭和58年4月、奈良国立文化財研究所）は概略次のように書いている。

○調査地域 飛鳥寺の東南部、昭和31年に検出した石敷広場の東方  
約40m

- 遺構は、上層（Ⅱ期）、下層（Ⅰ期）に大別される。
- Ⅰ期の遺構  
土壇SK663と土壇664がある。

SK663は東西4m、南北2m以上の規模をもつ。埋土からは多量の瓦類とともに、鉄滓・炭化物および垂球形土製品が出土した。

瓦類はいずれも黄褐色を呈する薄手の丸・平瓦で7世紀前半代に位置づけられる。

#### ○まとめ

石敷・石組溝の築造年代については、下層の土壌SK663出土の瓦が飛鳥寺の創建時までには遡りえず、7世紀前半代に位置づけられるものであることから、7世紀中頃以降と推定される。

昭和54年調査などでも、石敷広場と同じ方位の振れをもった遺構（木樋・石敷など）が検出されており、それらは7世紀前半から中頃の遺構とみられている。

飛鳥寺の南門の南に石敷広場があり、その東に土壌（土を掘った穴）があり、下層の土壌SK663には多量の瓦が捨てられていた。その瓦の年代は7世紀前半代であるという。したがって「石敷・石組等の築造年代」は「7世紀中頃以降」であろうとしている。

7世紀中頃は斉明天皇の時代である。斉明天皇は656年に肥前から大和の飛鳥に移住して都造りに専念している。特に石を用いた多くの施設を造っている。斉明天皇が7世紀前半の瓦や土器を土壌に捨てて新しく石敷・石組溝等を造っているのであろう。石敷広場は斉明天皇が造ったと思われる。

重要なことは、7世紀前半に大和で瓦を作っていることである。斉明天皇は656年に肥前から大和へ移住している。その前に瓦葺きの建物が建てられている。誰が建てたのであろうか。記録等は一切無い。斉明天皇はそれを壊して新しく石敷・石組溝等を造っている。

### (3) 石敷広場の調査

昭和31年(1956年)に飛鳥寺の第1次発掘調査が行われて南門の南に石敷広場が検出された。1984年にその南の発掘調査が行われた。『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 15』(1985年6月、奈良国立文化財研究所)は概略次のように書いている。

□調査地域 飛鳥寺南方石敷広場

○遺構 石敷SX670・SX671、石組溝SD662、道路状遺構SF680

- 石敷(SX670)は、1956年に検出した石敷広場と一連の遺構である。石敷は東南隅部の一部の攪乱を除いて良好に遺存し、約30cm大の河原石が敷きつめられている。

南端・東端は一回り大きな河原石を南・東に面をそろえてたて並べ、縁石としている。

東縁石はほぼ南北方向であるが、南縁石は西で北へ7-8度偏れている。

(中略)

○導水施設 (SX675)

- 石組溝SD662の南18mで、瓦製土管をつなぎ合わせた東西方向にのびる導水施設SX675を検出した。土管は行基丸瓦と同じ技術で作られており、外表は縄叩き目が残存する。
- 土管の形態・製作技法からは、7世紀後半頃の構築と考えられる。

○まとめ

(中略)

- 石敷広場の東・南縁石の交差状況から、この石敷広場は参道(飛鳥寺伽藍中軸線)に対して西で北に7-8度の振れをもつことが確認された。

- また、石敷広場の下層から7世紀前半頃の土器・瓦が出土している。このことから、石敷広場は7世紀前半以降に造営されたものであり、その性格は東西長66m以上、南北幅約20.5mの石敷道路、あるいは回廊などの建物基壇と考えることもできるが、今後さらに検討を必要としている。

石敷広場は7世紀前半以降に造営されたものであるという。石敷広場はやはり斉明天皇が造ったのであろう。

導水施設(SX675)が検出されており、「土管の形態・製作技法からは、7世紀後半頃の構築と考えられる」とある。天武天皇の時代であろう。斉明天皇が石敷広場を造り、その後に天武天皇が導水施設を造っているのであろう。

#### (4) 飛鳥寺の東側の調査

平成4年に飛鳥寺の真東の、伽藍中軸線から140mの地域の調査をしている。『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 23』（平成5年5月、奈良国立文化財研究所）にその報告が載っている。

□調査地域 飛鳥寺の真東140mの地点

○遺構

- 礎石建ち基壇建物(SB840)が検出された。方位は北で西に8度の振れをもつ。
- (基壇は)15層前後に及ぶ版築を行って築成されている。基壇上には東西3間、南北1間の礎石抜き取り穴を確認。礎石据え付け堀形内からは7世紀後半の土器が出土した。

- SX850はSB840西妻柱筋から西に8.1m（27尺）を隔ててある南北方向の石列である。SB840と同じく北で西に8度振れている。
- 東西溝SD845は幅1m、深さ0.5mの素堀り溝である。溝内には多量の瓦が含まれ、その中には竹状模骨痕をもつ丸瓦も多量にあった。

## ○遺物

瓦埴類 軒丸瓦、軒平瓦、垂木先瓦、鴟尾、熨斗瓦、面戸瓦、埴のほか整理箱240杯分の丸瓦・平瓦が出土した。

- 軒丸瓦I型式には瓦範の傷みがほとんどないIaと、主に中房に傷みが生じたIbと、範傷が最も進み外縁の広いIcがあり、瓦当はこの順で厚くなる。

## 木製品

- 建築部材の類では、扉の軸受けとなる材（鼠走（ねずばしり）あるいは闔（しきみ））等がある。

## ○まとめ

- 今回の調査で検出したSB840は、昭和31年—33年の発掘調査で塔、中・東・西の三金堂、講堂、南・西門を確認して以来の礎石建ち基壇建物である。
- SB840は、東西棟で、西側に犬走り・溝を伴い、またこれら一連の施設が、飛鳥寺創建時までは遡らず、7世紀後半の築造であることなどから、東門である可能性は低い。
- 昭和57年の寺域東北隅の調査で確認した寺域の東限を画する堺SA600の延長線は今回の調査地域の東を通り、SB840はそれより内側に位置する。
- SA600は北で西に8度の振れをもつが、今回検出したSB840、石列SX850、南北溝SD860も全く同じ振れをもっていることは興味深い。

飛鳥寺の東140mの地点に「礎石建ち基壇建物（SB840）」が検出されたという。「15層前後に及ぶ版築を行って築成されている」とあるから丁寧な造りをしている。

この調査で重要なことが判明した。

「礎石建ち基壇建物SB840は、東西棟で、西側に犬走り・溝を伴い、またこれら一連の施設が、飛鳥寺創建時までは遡らず、7世紀後半の築造である」という。出土した軒丸瓦は「I型式（花組）」であり、「Ia」「Ib」「Ic」が出土している。「I型式a」の瓦が「7世紀後半」に使われている。「Ib」「Ic」はそれ以降であろう。

「I型式」は飛鳥寺の創建瓦であるといわれている。「6世紀末の瓦」とされている。それが今回の調査で「I型式a」が「7世紀後半」に使用されていることが判明した。「I型式（花組）」は飛鳥寺の創建瓦ではないということになるのではないだろうか。

もう一つ重要なことが判明した。「礎石建ち基壇建物（SB840）」が検出され、方位は北で西に8度の振れをもつ」とある。また「SA600は北で西に8度の振れをもつが、今回検出したSB840、石列SX850、南北溝SD860も全く同じ振れをもっていることは興味深い」とある。

北で西に8度の振れをもつ遺跡を列举すると次のようになる。

#### ○北で西に8度の振れをもつ遺跡

- 南北堀（SA600）
- 礎石建ち基壇建物（SB840）
- 石列SX850
- 南北溝SD860

この中で礎石建ち基壇建物（SB840）は「7世紀後半」の築造である。その他の遺跡も「7世紀後半」の築造であろう。南北塀（SA600）も「7世紀後半」の築造ということになる。

南北塀（SA600）は「東西塀SA500が（東で）南折し、南北塀SA600に連続する」とある。東西塀SA500も「7世紀後半」の築造ということになる。

昭和52年に行われた発掘調査では「SA500の南約9mの位置にある内濠（SD503）を検出した」とある。東西塀「SA500」と「SD503」は平行している。同時に造られているのであろう。「SD503」も「7世紀後半」の築造ということになる。

ところが昭和58年の発掘調査報告では「東西溝SD503（内濠）」の年代は「6世紀末—7世紀初頭」であるとしている。

#### □飛鳥寺の「北側」の発掘調査報告（再度掲載）

- 東西塀SA500は（東で）南折し、南北塀SA600に連続する。
- 東西溝SD503（内濠）は東で南に折れ、南北溝SD601に連なる。

堆積土からは6世紀末—7世紀初頭の須恵器坏身片、赤焼きの桶巻き作り平瓦片が少量出土した。

#### ○まとめ

これらの築造年代とその存続期間については、SD503出土の土器や瓦から飛鳥寺創建時まで遡ることは明らかである。

『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 13』（昭和58年4月、奈良国立文化財研究所）

出土した「須恵器坏身片」からこれらの溝や塀は「6世紀末—7世紀初頭」の築造であるとして「飛鳥寺創建時まで遡ることは明らかである」としている。

しかしこれらは「7世紀後半」の築造であろう。「須恵器坏身片」を「6世紀末—7世紀初頭」としているのは「須恵器の編年」を使用しているからである。「約80年」も早くなっているであろう。

ここでも「須恵器の編年」による害が出ている。

## (5) 飛鳥寺の西側の調査

飛鳥寺の西側は『日本書紀』に「飛鳥寺の西の槻」としてしばしば出てくる重要な場所である。

『飛鳥京跡二 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第四十冊』（奈良県立橿原考古学研究所）に昭和41年の第11次調査の報告がある。

「入鹿の首塚」の五輪塔に南接する地域の発掘調査を行い、五輪塔東側より、幅約4.3m、一面を礫の敷石を用いたSH6682の敷石遺構が、南北30mにわたって整然と遺存していること、飛鳥寺西門の西側で、寺域を劃すると思われる幅約1.20mの南北方向の大溝SD6685が遺存していることなど、予知しなかった遺構を検出した。（中略）

飛鳥寺伽藍中軸線からこの大溝（SD6685）の中心線へは西へ76.40mの距離となる。（中略）飛鳥寺の西門の南北の中心線が伽藍中軸線より西へ69.935mであるから西門とSD6685の中心線との間隔は6.465mという計算になる。

『飛鳥京跡二』第11次調査

「飛鳥寺西門の西側で、寺域を劃すると思われる幅約1.20mの南北方向の大溝SD6685」が検出されたとある。「飛鳥寺の西を劃する溝」であるという。



昭和44年に第18次調査が行われた。同じ『飛鳥京跡二』に次のように書いている。

今次発掘調査は第11次調査より北へ約51m隔てたところである。

第11次調査で検出した大溝（SD6685）の延長部を検出した。この大溝は70.00mが遺存していることが判明した。その大溝の中軸線は飛鳥寺の伽藍の中軸線に対して西方へ75.43mであった。『飛鳥京跡二』第18次調査報告

大溝（SD6685）は「飛鳥寺の伽藍の中軸線に対して西方へ75.43m」のところにあるという。大溝は南北に70m以上は続いているという。

次に奈良国立文化財研究所により、飛鳥寺の西回廊と西門付近の発掘調査が行われた。『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 15』（1985年6月、奈良国立文化財研究所）は概略次のように報告している。

□調査地域 飛鳥寺西回廊及び西門

○西回廊とその周辺

- 南北溝があり、断面は浅いU字形で、溝幅は約2.5m、深さ約0.6mの素堀り溝である。埋土からは多量の瓦片とともに7世紀後半—末頃の土器片や円面硯などが出土した。

○西門

- 調査地は安居院の西約70mの南北旧道と通称入鹿塚へ至る道との交点の西南にあたる。
- 1956年（昭和31年）の調査では飛鳥寺西門の遺構が検出され、今調査地の東端に西門の西南部が及ぶものと想定された。

- 1966年の調査には、調査地の西と南の水田において奈良県（橿原考古学研究所）による調査がなされ、石敷、石組大溝、石組小溝が検出された（飛鳥京第11次調査）。

さらに1969年には北方の水田において石組大溝の延長部が確認されており（同第18次調査）、今調査地にも一連の遺構が及ぶものと推定されている。

- 調査の結果、石組小溝、石組大溝、石列等を検出した。石組小溝と石組大溝は飛鳥京第11・18次調査のSD6684・SD6685にあたるもので、その位置、規模等は一致している。石組大溝（SD6685）は溝幅1.25mで、北100mの地点でも確認しており、南北約120m程にわたり、飛鳥寺寺域西限にそって南北に設けられているものである。
- 大溝は側石の外約90cmの位置から大きな据え付け溝を穿って構築されている。その裏込め土中からは多量の瓦片、礫とともに、7世紀後半に至って成立すると考えられる技術でつくられた土師器甕の把手が出土した。従って、この石組大溝は飛鳥寺創建当初からの遺構ではなく、7世紀後半以降に設けられたものと考えられる。

「飛鳥寺寺域西限」の石組大溝（SD6685）は南北約120m程にわたり存在しているという。

飛鳥寺の西回廊からは「7世紀後半—末頃」の土器片や円面硯が出土しているという。西回廊は「7世紀後半—末頃」に造られている。

石組大溝（SD6685）の裏込め土中から7世紀後半以降の技術で作られた土師器甕の把手が出土している。飛鳥寺の西限の大溝も「7世紀後半以降」に造られている。

## 2 飛鳥寺周辺の発掘調査で判明したこと

### (1) 飛鳥寺の完成時期

飛鳥寺周辺の発掘調査で重要なことが判明した。

飛鳥寺の西回廊は「7世紀後半—末頃」に造られているという。飛鳥寺の寺域を画する西の石組大溝（SD 6 6 8 5）も「7世紀後半以降」に造られている。

回廊や飛鳥寺の寺域を画する石組大溝は飛鳥寺の一部である。これらも含めて「飛鳥寺」である。回廊や大溝も含めて完成したときが「飛鳥寺の完成」である。「飛鳥寺の完成」は「7世紀後半—末頃」ということになる。

○飛鳥寺周辺の発掘調査で判明したこと

- 飛鳥寺の西回廊 7世紀後半—末頃の造営
- 飛鳥寺の西限の石組大溝 7世紀後半以降
- ◎飛鳥寺の完成（移築）時期 7世紀後半～末頃

従来は、考古学でも「飛鳥寺＝法興寺」説であり、「飛鳥寺の創建」は法興寺の創建である「596年」にしてきた。それが覆ったことになる。

飛鳥寺の回廊は「7世紀後半—末頃」の造営であることが発掘調査により判明した。一方、「法興寺の回廊（歩廊）」は「592年」に造営を始めている。『日本書紀』は次のように書いている。

- （崇峻）五年（592年）十月、是の月、大法興寺の仏堂と歩廊を起こす。

- (推古) 元年 (593年) 正月、仏の舎利を以て法興寺の刹柱の礎の中に置く。

- (推古) 四年 (596年) 十一月、法興寺、造り竟 (おわ) る。

『日本書紀』

「592年」に「大法興寺の仏堂と歩廊を起こす」とある。「歩廊」は「回廊」である。「596年」に「法興寺、造り竟 (おわ) る」とある。「回廊」も「596年」には完成している。

ところが飛鳥寺の回廊の完成は「7世紀後半—末頃」である。やはり「約80年」の誤差がある。「飛鳥寺≠法興寺」である。飛鳥寺周辺の発掘調査により、「法興寺」は「飛鳥寺」ではないことが確定した。

#### ○法興寺と飛鳥寺の完成時期

- 飛鳥寺の完成                      7世紀後半—末頃
- 法興寺の完成                      596年
- 「飛鳥寺≠法興寺」

「飛鳥寺≠法興寺」は考古学の発掘調査により証明された。「20年」以上も前のことである。

しかし「考古学界」にはその認識がない。今でも発掘調査報告書は「飛鳥寺の創建」を「596年」にしている。「考古学界」は早急に「飛鳥寺=法興寺」説を破棄すべきである。

## (2) 「飛鳥寺」の移築

「飛鳥寺の完成」は「7世紀後半—末頃」である。それは「飛鳥寺の移築」の時期と一致する。

天武天皇は筑紫の「元興寺」を「672年—677年」に大和の飛鳥に移築している。それは中心伽藍の移築であり、回廊と大溝は新しく造っている。

飛鳥寺の西門の第一次発掘調査では「周囲に堆積した遺物中に伽藍創建時のものと思われる素弁十弁の軒丸瓦が見当たらず、それより新しいものばかり」であると書いている。西門には中心伽藍の瓦よりも新しい瓦が葺かれている。西門・回廊は中心伽藍よりも後に造られている。

### ○飛鳥寺の移築と完成

- 元興寺の移築 「672年—677年」 (中心伽藍の移築)
- 飛鳥寺の完成 「7世紀後半～末頃」 (回廊・大溝等を造る)
- 回廊の瓦は大和で新しく造っている。

「飛鳥寺」が大和の飛鳥に誕生するのは「7世紀後半—末頃」である。「672年」の「壬申の乱」の時には「飛鳥寺」はまだ存在していない。それが発掘調査によって立証された。

『日本書紀』の「(斉明)三年(657年)」に飛鳥寺が出てくる。

(斉明)三年(657年)七月三日、靺鞨國の男二人女四人、筑紫に漂泊する。言う、臣等、初め海見嶋に漂泊す。乃ち駅を以て召す。十五日、須弥山の像を飛鳥寺の西に作る。且つ盂蘭盆会を設ける。暮れに靺鞨人を饗える。 『日本書紀』

この飛鳥寺は存在しているのではなく、須弥山の像のある位置を示す指標として使っていると説明してきた。それが発掘調査により証明された。

「壬申の乱」のときにも飛鳥寺が出てくる。

(天武)元年(672年)六月二十九日、是の日、大伴連吹負は密かに留守司の坂上直熊毛と之を議す。一二の漢直等に謂いて曰く、「我

は詐りて高市皇子と称し、数十騎を率いて飛鳥寺の北路より之を出て営に臨む。乃ち汝は内応せよ。」という。既にして百済の家に兵を繕い南門より出る。先ず秦造熊に犢鼻（ふんどし）をさせて馬に乗せて馳せて、寺の西の営の中に唱（とな）えて曰く、「高市皇子、不破より至る。軍衆は多く従う」という。ここに留守司高坂王、及び兵を興す使者穗積臣百足等、飛鳥寺の西の槻の下によりて営を為す。

『日本書紀』

この飛鳥寺も存在しているのではない。この記事は『日本書紀』の捏造であると説明してきた。それが発掘調査により証明された。

### (3) 飛鳥寺の創建瓦と「Ⅰ型式（花組）」

飛鳥寺の創建瓦は「Ⅰ型式（花組）」と「Ⅲ型式（星組）」であるという。飛鳥寺の創建は「596年」としているから「Ⅰ型式（花組）」は「6世紀末—7世紀初頭」の瓦であると云われてきた。

ところが飛鳥寺の東140mの地点から「7世紀後半」に築造された礎石建ち基壇建物（SB840）が検出されて「Ⅰ型式a」「Ⅰ型式b」「Ⅰ型式c」の軒丸瓦が出土した。「Ⅰ型式（花組）」の瓦である。

「Ⅰ型式a」は瓦範に傷がないものである。「飛鳥寺の創建瓦」といわれている。それが「7世紀後半」に使われている。

「7世紀後半」は飛鳥寺の移築の時期である。「Ⅰ型式（花組）」は飛鳥寺を移築した時に大和で新しく造っているのではないだろうか。それを飛鳥寺に使い、また礎石建ち基壇建物（SB840）にも使っているのであろう。

そうであれば「Ⅰ型式（花組）」は「飛鳥寺の創建瓦」ではないということになる。「瓦の研究」をしている考古学者にとっては重大な問題であろう。これについては後に詳細に検討する。

#### (4) 導水施設

飛鳥寺の南にある石敷広場の石組溝（SD 6 6 2）の南 1 8 m の地点で東西にのびる導水施設（SX 6 7 5）が検出された。土管の形態・製作技術から「7 世紀後半頃」のものであるという。

導水施設は日常生活に必要な施設である。飛鳥寺を移築したとき同時に造っているのであろう。飛鳥寺の創建が「7 世紀後半頃」であることを導水施設も示している。

## 第6章 飛鳥寺の創建瓦

「飛鳥寺第1次発掘調査」では「Ⅰ型式（花組）が創建当時の瓦で、Ⅲ型式（星組）はその後に作られている」としている。ところがその後の研究により、花谷浩氏は「飛鳥寺の創建軒丸瓦は花組（Ⅰ・Ⅱ・Ⅵ）と星組（Ⅲ—Ⅴ・Ⅶ—Ⅹ）」であるという。

豊浦寺の発掘調査により、飛鳥寺の創建軒丸瓦は「星組」であることが判明した。「飛鳥寺第1次発掘調査」の「花組創建瓦説」は誤りであることが確定した。

しかし「Ⅰ型式（花組）」も創建瓦であるという「花谷浩説」はそのまま残っている。ここでは「Ⅰ型式（花組）」は創建瓦ではないことを論証する。



## 1 飛鳥寺の「I型式（花組）」瓦

### (1) 軒丸瓦と瓦範

飛鳥寺の創建瓦といわれている「I型式（花組）」の瓦は「7世紀後半」の礎石建ち基壇建物（SB840）に使われている。飛鳥寺の創建は「596年」といわれているが、「I型式（花組）」は「7世紀後半」の飛鳥寺の移築時に生産されたのではないだろうか。このような疑問が生じた。「飛鳥寺の創建瓦」について詳細に検討しよう。

「瓦」について調べるには「瓦範」の知識が必要である。ここで改めて「瓦範」について説明する。

軒丸瓦には装飾のために文様をつける。木型に文様を彫刻して、粘土の瓦をそれに押し当てて文様をつける。その彫刻された木型を「範」という。瓦の範であるから「瓦範」という。

同じ木型（瓦範）で造られた瓦を「同範の瓦」という。木型は使用している間に傷ができる。その傷のできた順に瓦は造られている。したがって「瓦の文様の傷」を見ると作られた順番がわかる。「瓦範」の傷は年代を決める重要な手がかりになっている。

傷がひどくなると木型（瓦範）は彫り直して使う。そのため文様は変わっていく。

「I型式（花組）」の瓦範（木型）にも傷が付き、彫り直しが行われている。それをa, b, cの3段階に細分している。

#### ○飛鳥寺の「I型式（花組）」の瓦範の傷による分類

- Ia …… 瓦範に傷がほとんどないもの

- I b……主に中房に傷が生じ、中房周囲を圈線状に高くし、蓮子を大きく彫り直したもの。
- I c……範傷が最も進み外縁を広くしたもの

飛鳥寺の「I型式（花組）」の瓦範はこの3種類に分類されるという。

## (2) 「I型式a」の瓦

「I型式a（花組）」の同範瓦について、花谷浩氏は『古代瓦研究Ⅰ－飛鳥寺の創建から百濟大寺の成立まで－』（奈良国立文化財研究所、2000年）の中の「3 飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」で次のように述べている。

I型式の同範品は、飛鳥では豊浦寺（I a）、和田麿寺（I a）、古宮遺跡（I a）から、ほかに山背・高麗寺跡（I a、I b）から出土している。

花谷浩氏

飛鳥寺の「I型式（花組）」と同範の「I a」の瓦は豊浦寺や和田麿寺等から出土しているという。飛鳥寺の「I型式（花組）」の瓦を造った同じ木型（瓦範）でこれらの寺の瓦は造られている。

これらの寺の「I型式a（花組）」の瓦は「いつ頃」造られているのであろうか。それが判明すると飛鳥寺の「I型式（花組）」の瓦の年代も判明する。

### (3) 豊浦寺の「I 型式 a」の瓦

花谷浩氏は豊浦寺の創建瓦について「ごくわずかな I 型式 A a を除くと、豊浦寺金堂の創建瓦は星組の瓦で構成されている」と述べている。「I 型式 a」の瓦は極僅かであり、「豊浦寺金堂の創建瓦は星組」であるという。

豊浦寺の中心伽藍（金堂・講堂等）は「星組」であり、その他の建物は宇治の隼上り瓦窯跡で焼かれた「雪組」の瓦が使われている。「I 型式 a（花組）」の軒丸瓦は何処に使われたのであろうか。

豊浦寺は「672年—686年」の間に肥前から移築している。豊浦寺の「I 型式 a（花組）」の瓦はその移築の時に「星組の創建瓦」が破損した分を補うために大和（近畿地方）で新しく造っているのではないだろうか。そのため「I 型式 a」の瓦は極僅かしか出土しないのであろう。

豊浦寺の「I 型式 a」の瓦は移築の時期（672年—686年）に大和で焼かれたのではないだろうか。

飛鳥寺の東140mの地点から検出された礎石建ち基壇建物（SB840）に使われていた「I a（花組）」の瓦も「7世紀後半」であるという。移築の時期（672年—686年）と一致する。

礎石建ち基壇建物（SB840）は大和の飛鳥に新しく造っている。「I a（花組）」の瓦は大和地方で焼かれている。「I a（花組）」の瓦は「7世紀後半」の移築の時期（672年—686年）に大和で生産されている。

飛鳥寺の「I a（花組）」と礎石建ち基壇建物（SB840）の「I a（花組）」の瓦は「同範の瓦」である。同じ木型で造られている。飛鳥寺の「I a（花組）」の瓦も大和で造られていることになる。

飛鳥寺は元興寺であり、筑紫に創建されている。瓦は筑紫（九州）で焼かれている。大和で焼かれている「I a（花組）」は「飛鳥寺の創建瓦」ではない。

#### (4) 和田麿寺の「Ⅰ型式a」の瓦

和田麿寺の「Ⅰ型式a」の瓦についてみてみよう。

和田麿寺は蘇我馬子が建てた寺院（塔）であるといわれてきた。585年に蘇我馬子は塔を「大野の丘の北」に建立する。

（敏達）十四年（585年）二月、蘇我大臣馬子宿禰、塔を大野の丘の北に起（た）て、大会（だいえ）の設斎（おがみ）をする。即ち（司馬）達等が前に獲た所の舍利を以て塔の柱頭に蔵（おさ）む。

『日本書紀』

奈良県高市郡明日香村豊浦にある和田麿寺が「大野の丘の北の塔」であるといわれてきた。しかし和田麿寺の第1次、第2次発掘調査により、それは否定された。

（注記）「大野の丘の北の塔」は肥前に建立されている（古代史の復元⑥『物部氏と蘇我氏と上宮王家』）。

『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 5』（奈良国立文化財研究所、昭和50年3月）の中の「和田麿寺 第1次発掘調査の報告書」は次のように報告している。

軒瓦は、軒丸瓦13型式66点、軒平瓦3型式13点が出土した。軒丸瓦には、豊田麿寺（天理市）出土のものと同範かと思われる単弁11弁蓮華文瓦が6点、豊浦寺、奥山久米寺出土のものと同型式の単弁8弁蓮華文瓦が16点ある。この他に、飛鳥寺創建のものと同型式の単弁10弁蓮華文瓦や豊浦寺出土の高句麗系の、弁間に珠点を配する型式のものなど、飛鳥時代に属する多様な型式の軒丸瓦が出土している。（中略）

鷗尾は、完形に近い大形品 1 個体分と、数個体分の破片がある。完形に近い大形品は（中略）7 世紀後半中頃のものと思われる。（中略）

瓦製土管は、（中略）7 世紀後半のものと考えられる。

『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 5』

「飛鳥寺創建のものと同型式の単弁 10 弁蓮華文瓦」が出土しているという。「I 型式（花組）」の瓦である。「I a（花組）」であろう。

「豊浦寺出土の高句麗系の、弁間に珠点を配する型式のもの」も出土しているという。「高句麗系（雪組）」である。豊浦寺に供給された「高句麗系（雪組）」の瓦は「宇治市の隼上り瓦窯跡」の発掘調査により「640 年以降」に造られていることが判明した。「和田麿寺出土の高句麗系瓦（雪組）」も「640 年以降」に造られているのであろう。

鷗尾も出土しており、「7 世紀後半中頃のもの」であるという。瓦製土管も「7 世紀後半」であるという。

「I 型式（花組）」の瓦以外はいずれも「7 世紀後半」である。「I 型式」の瓦も「7 世紀後半」であろう。

第 2 次調査の報告書『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 6』（奈良国立文化財研究所、昭和 51 年 5 月）は次のように報告している。

[塔] 大野塚の土壇上には礎石が 2 個露出し、瓦の破片が多量に散乱していた。調査の結果、基壇上において、礎石 3、礎石抜取痕跡 3、根石群 2 を検出し、塔であることを確認した。（中略）

塔の築造年代は、7 世紀後半と想定できる。その理由として、一つには基壇版築土中から、豊浦寺・奥山久米寺および法輪寺の塔心礎壇から出土した瓦と同型式とみてよい、中房が半円球状に突出する単弁 8 弁蓮華文軒丸瓦および同時期の丸・平瓦が出土しているこ

と。二つには塔および周辺から出土した軒丸瓦の70%近くを複弁8弁蓮華文軒丸瓦が占めていること。三つには、心礎上面と四天柱の礎石上面はほぼ同一高をなすことがあげられる。

『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 6』

塔の基壇が検出されて「塔の築造年代は、7世紀後半と想定できる」とある。和田廃寺はすべて「7世紀後半」である。「I型式(花組)」の瓦も「7世紀後半」であろう。

### (5) 「I型式a」の製作年代

「I型式a」の瓦は「豊浦寺(Ia)、和田廃寺(Ia)、古宮遺跡(Ia)」から、ほかに山背・高麗寺跡(Ia、Ib)から出土している」という。

豊浦寺(Ia)、和田廃寺(Ia)は「7世紀後半」である。高麗寺跡(Ia、Ib)からも「7世紀後半」の築地塀が検出している。古宮遺跡(Ia)も「7世紀後半」であろう。「I型式a」の瓦を出土している寺(遺跡)はすべて「7世紀後半」である。

飛鳥寺の東の礎石建ち基壇建物(SB840)から出土した「I型式a」の瓦も「7世紀後半」である。「I型式a」の瓦はすべて「7世紀後半」である。「I型式a」は飛鳥寺の「I型式a」と同範の瓦である。同じ木型で造られている。「飛鳥寺の創建瓦」と云われている「I型式a」も「7世紀後半」であろう。

従来は、飛鳥寺の「I型式(花組)」は飛鳥寺の創建瓦であり、「6世紀末—7世紀初頭」の瓦であるといわれてきた。それは科学的に年代を検討したのではなく、出土する量が多いことと、主要建物に使用されているということから創建瓦であると見なして、年代は「飛鳥寺=法興寺」として法興寺の創建で

ある「6世紀末—7世紀初頭」を当てているだけである。科学的に年代を決めているのではない。

その前提になっている「飛鳥寺＝法興寺」説は誤りであることが判明した。飛鳥寺の創建を「6世紀末—7世紀初頭」としているのは誤りである。飛鳥寺の「Ⅰ型式a」の瓦が「6世紀末—7世紀初頭」としているのは誤った解釈から生まれた説である。

飛鳥寺以外の「Ⅰ型式a」の瓦はすべて「7世紀後半」である。飛鳥寺の「Ⅰ型式a」の瓦も「7世紀後半」であろう。飛鳥寺の瓦だけが「7世紀後半」ではないという根拠は一つもない。

この件に関して或る考古学者に質問してみた。すると「瓦は生産するときと、それを使用するときと、廃棄するときがある」という返事をいただいた。同じ時期に生産された瓦でも使う時期が異なる場合があるという意味であろう。

しかし「6世紀末—7世紀初頭」に生産された瓦が「7世紀後半」になって使用されることがあるだろうか。大きな寺院を造る時は大量の瓦が必要になる。瓦は手作りであるから一つの寺院の瓦を作るのでも大変である。それを大量に保管して置いて「7世紀後半」になって使うということとはあり得ないであろう。

しかも「豊浦寺（Ⅰa）、和田廃寺（Ⅰa）、古宮遺跡（Ⅰa）、山背・高麗寺跡（Ⅰa、Ⅰb）」という多くの寺に使用されている。大量の瓦を半世紀以上も保管しておいて急にこれらの寺々に使うということとはあり得ない。「6世紀末—7世紀初頭」の時点で半世紀後にこれらの寺を創建するという計画は無かったはずである。半世紀も大量の瓦を保管しておく理由がない。

「Ⅰ型式a」の瓦はすべて「7世紀後半」に生産されている。飛鳥寺の「Ⅰ型式」も「7世紀後半」に生産されたものである。したがって飛鳥寺の「Ⅰ型式（花組）」は創建瓦ではない。

飛鳥寺は天武天皇が「672年—677年」に移築している。「Ⅰ型式（花組）」は移築のときに生産された瓦である。

○飛鳥寺の創建瓦について（結論）

- 飛鳥寺は筑紫の元興寺を天武天皇が「672年—677年」の間に移築したものである。
- 元興寺の瓦は「星組」であるから飛鳥寺の創建瓦は「星組」である。「花組」は創建瓦ではない。
- 飛鳥寺の「花組」は移築の時（672年—677年）に大和で生産された瓦である。



## 2 「Ⅰ型式（花組）」は創建瓦ではないことの検証

### (1) 百済と飛鳥寺の創建瓦

「Ⅰ型式（花組）」の瓦は飛鳥寺の創建瓦ではないことを検証しよう。

李タウン氏は『飛鳥・白鳳の瓦と土器 一年代論—』（帝塚山大学古代の土器研究会、1999年）所収の「百済の瓦からみた飛鳥時代初期の瓦について」の中で次のように述べている。

本稿では、飛鳥寺の花組と星組、7世紀第一四半期の軒平瓦、河内新堂烏含寺跡の瓦の年代や瓦工系統を、百済の瓦当文様や製作技法の視角から新たに考察することを目的とする。（中略）飛鳥寺の報告書には花組Ⅰ型式が星組のⅢ型式より早い創建当時から作られたものとあり、亀田修一も花組の軒丸瓦が創建当時から主に作られたものであると述べている。その根拠は出土量の差と伽藍内における使用建物の格差によるものである。（中略）

製作技法上は、星組の方が百済の製作技法を忠実に守っており、渡来時期は花組より先行すると考えられる。（中略）

#### 5 まとめ

飛鳥寺の星組を指導した瓦工は百済の旧衛里遺跡に瓦を供給した瓦工の一部であり、花組を指導した瓦工は百済の龍井里寺跡に瓦を供給した瓦工の一部である。そして前者が後者より先に渡来したことが製作技法から推定される。

李タウン氏

「飛鳥寺の報告書には花組Ⅰ型式が星組のⅢ型式より早い創建当時から作られたもの」とあるが、李タウン氏も「その根拠は出土量の差と伽藍内における

使用建物の格差によるもの」であると指摘している。「Ⅰ型式 a (花組)」が「飛鳥寺の創建瓦」であるというのは科学的に決められたのではない。

李タウン氏は百済の瓦の製作技法からみて星組の瓦工の方が花組の瓦工よりも先に渡来していると言う。「星組」の方が創建瓦である可能性が高い。

## (2) 「元興寺」と百済の瓦工

「577年」に日本列島に初めて百済から「造仏工・造寺工」が来る。

(敏達) 六年 (577年) 十一月、百済国王、還使大別王等に付けて  
経論若干卷、并 (あわせ) て律師・禪師・比丘尼・呪禁師・造仏工・  
造寺工、六人を献ず。遂に難波の大別王の寺に安置す。『日本書紀』

「577年」は阿每王権の時代である。「難波の大別王の寺に安置す」とある。「難波」は阿每王権の海の玄関口である福岡市東区の多々良川の川口である。「造仏工・造寺工」は阿每王権に来ている。阿每王権は筑紫に「元興寺」を創建している。「造仏工・造寺工」は「元興寺」を建立するために来ているのではないだろうか。

「588年」に百済からさらに「寺工二人、瓦博士4人」が来る。

(崇峻) 元年 (588年)、是歳、百済国は恩率首信・徳率蓋文・那率福富味身等を遣わし、調を進め、并せて仏舎利、僧聆照律師・令威・恵衆・恵宿・道嚴・令開等、寺工太良未太・文賈古子、鑪盤博士将徳白味淳、瓦博士麻奈文奴・陽貴文・倭貴文・昔麻帝彌、画工白加を献じる。『日本書紀』

「588年」に瓦博士が4人も渡来している。寺の建築が本格化したのであろう。

これらの寺工・瓦博士は阿毎王権の「元興寺」を建立するために来ている。元興寺の極楽坊禅室（国宝）の建築部材は582年に伐採されたヒノキであるという。元興寺は「582年」頃から築造がはじまっている。時期が一致する。

「577年」に百済から来た「造仏工・造寺工」は各1名である。仏像や寺院の設計をしているのであろう。「588年」には「寺工二人、瓦博士4人」が来ている。実施部隊であろう。「元興寺」の瓦の生産がはじまったのである。

百済から最初に来た指導者（瓦博士）によって「元興寺」の瓦は作られている。李タウン氏が言うように瓦は「星組」である。4人の瓦博士は「星組」の瓦を作っている。

元興寺（飛鳥寺）の創建瓦は「588年」に百済から来た「星組」の瓦工によって造られている。「花組」の瓦は「7世紀後半」に造られている。「花組」はやはり飛鳥寺の創建瓦ではない。

### (3) 飛鳥寺の創建瓦と「I型式（花組）」瓦

元興寺は「672年—677年」に移築されて「飛鳥寺」になる。創建瓦は「星組」である。

移築のとき「星組」の創建瓦は多くを遺失したのであろう。破損したり、あるいは海へ落としたりしたのではないだろうか。それを「I型式a（花組）」の瓦で補ったのであろう。創建瓦の「Ⅲ、Ⅶ型式（星組）」と移築時に新しく造った「I型式（花組）」のサイズは一致する。

飛鳥寺出土の軒丸瓦の直径は次のようになっている。

○飛鳥寺出土の軒丸瓦の直径

■ I型式      16.2 cm

|          |         |
|----------|---------|
| ■ II型式   | 17.8 cm |
| ■ III型式  | 15.7 cm |
| ■ IV型式   | 14.6 cm |
| ■ V型式    | 14.5 cm |
| ■ VI型式   | 14.1 cm |
| ■ VII型式  | 15.6 cm |
| ■ VIII型式 | 16.4 cm |
| ■ IX型式   | 15.1 cm |
| ■ X型式    | 15.5 cm |

飛鳥寺の創建瓦は「星組」の「III型式」と「VIII型式」が主である。移築時に新しく作っている瓦は「花組」の「I型式」が主である。これらの軒丸瓦の直径はほぼ一致する。

○飛鳥寺のIII・VIII型式（星組）とI型式（花組）の軒丸瓦の直径

| <u>創建（星組）瓦の直径</u> |         | <u>移築時（花組）の瓦の直径</u> |      |
|-------------------|---------|---------------------|------|
| ■ III型式           | 15.7 cm | I型式（花組）             | 16.2 |
| ■ VIII型式          | 16.4 cm |                     |      |

創建瓦「星組」の直径は「15.7—16.4 cm」である。それを補うために移築時に造っている「花組」の瓦の直径はその中間の「16.2 cm」である。ほぼ同じ大きさである。「星組」瓦を「花組」瓦で補っている証拠であろう。

豊浦寺からも「I型式a」の瓦が極僅かであるが出土している。飛鳥寺の移築は「672年～677年」であり、豊浦寺の移築は「672年—686年」である。時期もほぼ同じである。豊浦寺を移築したときもやはり「星組」瓦の遺失分を「花組」で補っているのであろう。

花谷浩氏は「花組と星組とでは、軒丸瓦の紋様だけでなく、瓦当の作り方や丸瓦との接合技法、丸瓦・平瓦の製作技法など瓦作り全般に明確な違いがあ

る。これは工人の違いと認めてよく、両者の間に技術交流や花組から星組への技術変化は認められない。」と述べている。

「星組」は筑紫の元興寺で造り、「花組」は移築時に大和で造っている。時期も異なるし、瓦造りの技術も異なる。「瓦作り全般に明確な違いがある」のはそのためである。

## 第7章 飛鳥寺の移築を復元する

# 1 飛鳥寺と複弁蓮華文軒丸瓦

## (1) 飛鳥寺出土の軒丸瓦

飛鳥寺から出土した瓦について述べてきた。「星組」と「花組」である。ところが飛鳥寺からもっとも多く出土しているのは「複弁八葉蓮華文」の軒丸瓦である。

『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告）は飛鳥寺から出土した軒丸瓦について「型式」別に表示している。その一部を省略して載せる。（弁数のTは単弁、Fは複弁）

### ○飛鳥時代の軒丸瓦

|   | 型式   | 直径   | 蓮子数 | 弁数  | 出土個体数      | %            |
|---|------|------|-----|-----|------------|--------------|
| ■ | I    | 16.2 | 1+5 | T10 | 172        | 30.44        |
| ■ | II   | 17.8 | 1+7 | T8  | 1          | 0.18         |
| ■ | III  | 15.7 | 1+5 | T11 | 63         | 11.15        |
| ■ | IV   | 14.6 | 1+5 | T11 | 38         | 6.72         |
| ■ | V    | 14.5 | 1+6 | T11 | 15         | 2.65         |
| ■ | VI   | 14.1 | ?   | T11 | 8          | 1.41         |
| ■ | VII  | 15.6 | 1+4 | T9  | 2          | 0.35         |
| ■ | VIII | 16.4 | 1+4 | T9  | 14         | 2.48         |
| ■ | IX   | 15.1 | 1+4 | T8  | 1          | 0.18         |
| ■ | X    | 15.5 | 1+4 | T12 | 2          | 0.35         |
| ■ | XI   | 17.6 | 1+? | T8  | 3          | 0.53         |
|   | (小計) |      |     |     | <u>319</u> | <u>56.44</u> |

○奈良平安時代の軒丸瓦

|   | 型式   | 直径   | 蓮子数   | 弁数 | 出土個体数      | %            |
|---|------|------|-------|----|------------|--------------|
| ■ | XⅡ   | 17.4 | 1+5+9 | F8 | 3          | 0.53         |
| ■ | XⅢ   | ?    | 1+8   | T8 | 1          | 0.18         |
| ■ | XⅣ   | 18.6 | 1+4+8 | F8 | 235        | 41.59        |
| ■ | XⅤ   |      |       |    |            |              |
| ■ | XⅥ   | 18.3 | 1+8+8 | F8 | 4          | 0.71         |
| ■ | XⅦ   | 18.2 | 1+8   | F8 | 1          | 0.18         |
|   | (小計) |      |       |    | <u>244</u> | <u>43.19</u> |

○鎌倉時代の軒丸瓦

|   | 型式 | 直径   |      | 出土個体数 | %    |
|---|----|------|------|-------|------|
| ■ | XⅧ | 15.7 | (巴文) | 2     | 0.35 |

□総計 565 100

XⅣ型式は「235点」も出土している。「弁数」は「F8」とあり、「複弁八葉蓮華文」である。

飛鳥寺から出土した軒丸瓦を多い順に並べると次のようになる。

○飛鳥寺から出土している軒丸瓦の出土数の多い順

- XⅣ型式 235点
- I型式 172点
- Ⅲ型式 63点
- IV型式 38点
- V型式 15点
- Ⅷ型式 14点



出土数のもっとも多いのは「XIV型式」である。ところが「XIV型式」についてはこれまで検討をして来なかった。「XIV型式」は「奈良平安時代の軒丸瓦」となっているからである。「飛鳥寺の創建（移築）」とは関係がない。

## (2) 飛鳥寺の一大画期

上原真人氏は『歴史発掘 11 瓦を読む』（講談社、1997年）の中で飛鳥寺の軒丸瓦について次のように述べている。

### 飛鳥寺の一大画期

後の修理や再建規模が大きいと、そのときの瓦が創建時の瓦よりも多くなる。

昭和三一、三二（1956，57）年の飛鳥寺伽藍中枢部の発掘調査のさい、同じ型（范）で型抜きした文様の軒丸瓦のうち、最多数を占めたのは、七世紀後半の複弁八葉蓮華文軒丸瓦の235点。これは「創建年代差の理論」によって、飛鳥時代（六世紀末～七世紀前半）にさかのぼることが確実な軒丸瓦のなかで、もっとも多い素弁10葉蓮華文軒丸瓦（筆者注 I 型式）の172点、次点の素弁11葉蓮華文軒丸瓦（筆者注 III 型式）の63点の総和と等しい。もちろん、六世紀末～七世紀前半の軒丸瓦の総数316点は、七世紀後半～八世紀の軒丸瓦の総数246点よりも多いので、飛鳥寺が飛鳥時代に伽藍を整えたとする通説に異論をさしはさむ余地はない。しかし、七世紀後半に大規模な瓦の葺き替えを行い、屋根景観が一新した事実は否定できない。

上原真人氏

上原真人氏は飛鳥寺から出土した軒丸瓦は「七世紀後半の複弁八葉蓮華文軒丸瓦」がもっとも多いと述べている。

「複弁八葉蓮華文軒丸瓦」は『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告）の「XIV型式」である。飛鳥寺発掘調査報告では「奈良平安時代の軒丸瓦」となっている。ところが上原真人氏は「七世紀後半の複弁八葉蓮華文軒丸瓦」と書いている。最近の研究では「七世紀後半」であるという。

「七世紀後半」は移築の時期である。「XIV型式」の「複弁八葉蓮華文軒丸瓦」は「飛鳥寺の創建（移築）」と関係があることになる。

さらに上原真人氏は次のように述べている。

『日本書紀』によれば、天武天皇九（680）年四月、時の政府は諸寺を①国家直営の国大寺、②30年を限って食封を与える有封寺、③その他の寺々、の三ランクに格付けした。

その後、国大寺として優遇されたのは、川原寺・大官大寺・薬師寺など、いずれも天皇勅願の大寺院だった。しかし、前に記した天武九年の勅では、例外措置として飛鳥寺は従来どおり国家直営とする。こうした天武朝における飛鳥寺優遇策と、絶対多数を占める複弁八葉蓮華文軒丸瓦の存在は、密接な関係があるというのが私の持論である。

上原真人氏

上原真人氏は「天武朝における飛鳥寺優遇策と、絶対多数を占める複弁八葉蓮華文軒丸瓦の存在は、密接な関係があるというのが私の持論である」と述べている。

「複弁八葉蓮華文軒丸瓦」は天武天皇と関係があるという。飛鳥寺は天武天皇が筑紫の元興寺を大和の飛鳥に移築した寺である。「複弁八葉蓮華文軒丸瓦」は「七世紀後半」の瓦であるからまさに「天武天皇の時代の瓦」である。「複弁八葉蓮華文軒丸瓦」は天武天皇が元興寺を飛鳥に移築したときと関係があるのではないだろうか。

### (3) 西門と軒丸瓦

『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告）は「西門」について次のように報告している。

基壇の形式、礎石等南門と類似し、東辺中央に巾6尺程雨落の巾を狭めた処があつて、ここから東へバラス敷の通路がある。また南妻中央に築地痕跡と思われる玉石が認められた。（中略）

なお周囲に堆積した遺物中に伽藍創建時のものと思われる素弁十弁の軒丸瓦が見当たらず、それより新しいものばかりなのはそうしたわけであろうか。『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告）

西門の発掘調査では「Ⅰ型式（素弁十弁）」は見当たらないとある。「それより新しいものばかり」が出土したという。

ここには「新しい瓦」の「型式」は書かれていない。単に「新しいものばかり」とあるだけである。

「新しいものばかり」とあるから多数の出土があるのであろう。出土個数をもっとも多いのは「XIV型式（複弁八葉蓮華文軒丸瓦）」の「235点」である。次が「Ⅰ型式（素弁十弁）」の「172点」である。その次は「Ⅲ型式（星組）」の「63点」である。

「Ⅰ型式（素弁十弁）」は「見当たらない」とあるから出土していない。「Ⅲ型式（星組）」は中心伽藍に葺かれているから「西門」からは出土しないであろう。「新しいものばかり」とは「XIV型式（複弁八葉蓮華文軒丸瓦）」ではないだろうか。

『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告）では「XIV型式（複弁八葉蓮華文軒丸瓦）」は「奈良平安時代の軒丸瓦」としている。西門から「XIV型式（複弁八葉蓮華

文軒丸瓦)」ばかりが出土したのであろう。西門は「奈良平安時代」に造られたことになる。飛鳥寺の完成は「奈良平安時代」ということになる。

それはあり得ない。しかし当時の発掘調査をした人々は「奈良平安時代の軒丸瓦」と考えているからその説明ができない。そこで報告書には新しい瓦の「型式」を記述するのを止めて「新しいものばかり」と書いているのであろう。

西門からは「Ⅰ型式（素弁十弁）」より新しい「XⅣ型式（複弁八葉蓮華文軒丸瓦）」が出土している。西門は「Ⅰ型式（素弁十弁）」よりも後に造られている。

「Ⅰ型式（花組）」は元興寺を移築したときに創建瓦「Ⅲ型式（星組）」の遺失分を補うために大和で新しく造っている。中心伽藍は「Ⅲ型式（星組）」と「Ⅰ型式（花組）」である。

西門や回廊は中心伽藍（塔・金堂）の移築が終わった後に新しく造っている。そのため新しい「XⅣ型式（複弁八葉蓮華文軒丸瓦）」の瓦になっているのであろう。

## 2 飛鳥寺の中心伽藍

### (1) 塔・中金堂と東西金堂の基壇

『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告）には、飛鳥寺は「1塔3金堂（中金堂、東金堂、西金堂）」の伽藍配置であることが判明したと書いている。基壇については次のように書いている。

中金堂は基壇が壇上積で、花崗岩の地覆石と凝灰岩の羽目石とからなり、束を用いず葛石は見当たらない。

塔は基壇の構成は中金堂と全く同じ壇上積で、雨落の巾をややせばめ、地覆石前角に巾1寸の面をとっている。

東金堂と西金堂は塔を中心に全く対象的なものである。基壇は下成壇上に小礎石を配する特殊な二重基壇で、朝鮮に類例が幾つか発見されているが、我が国では始めて見るものである。上成基壇周辺は玉石積である。下成基壇は巾約2.4尺で周囲に玉石一段をめぐらし、壇上に礎石を据える。礎石は長径2尺前後の小さなもので、大半が加工されないままの花崗岩である。

『飛鳥寺』（飛鳥寺発掘調査報告）

「塔・中金堂」の基壇と「東・西金堂」の基壇は造りが異なるという。設計者が異なることを示している。

一つの伽藍で「塔」や「金堂」を異なる設計者が同時に設計をすることはあり得ないであろう。そのようなことをすればバランスのとれない奇妙な伽藍になる。「塔・中金堂」と「東西金堂」は同時に造っているのではない。設計する時期（時代）が異なるのであろう。

「東・西金堂の礎石」は「長径2尺前後の小さなもので、大半が加工されな  
いままの花崗岩」であるという。「東・西金堂」の方は「時間に追われて、急  
いで」造っている。「塔・中金堂」の方は時間に追われることもなく計画通り  
に造っているのであろう。「塔・中金堂」と「東西金堂」は建立する時期が異  
なるのではないだろうか。

## (2) 東西金堂と百済の定林寺

加藤謙吉氏は『古代を考える 古代寺院』（吉川弘文館）所収の「三 蘇我  
氏と飛鳥寺」で次のように述べている。

（飛鳥寺の）建築遺跡では東西金堂や西門が、扶余の定林寺（平百済  
塔麁寺）の金堂・中門と規模・建築プラン・柱間寸尺において共通  
する。

加藤謙吉氏

飛鳥寺の東西金堂と西門の規模・建築プラン・柱間寸尺は扶余の定林寺と共  
通しているという。百済の定林寺を設計した人が飛鳥寺の東西金堂や西門の設  
計に関与しているのであろう。

西門は移築時に新しく造っている。「東西金堂」も西門と同じ時期に新しく  
造っていることになる。西門は飛鳥寺の中心部の移築が終わった後に新しく造  
っている。「東西金堂」も飛鳥寺の中心部の移築が終わった後に新しく造っ  
てことになる。

飛鳥寺の中心部は「塔と中金堂」ということになる。「東西金堂」は「塔と  
中金堂」の移築が完成した後に回廊・西門と同時に同じ設計者によって造られ  
ている。

筑紫の元興寺から移築したのは「塔と中金堂」だけということになる。筑紫  
の「元興寺」は「1塔1金堂」の「四天王寺式伽藍配置」であったことになる。

筑紫の元興寺を飛鳥に移築して、「東西金堂」を新しく加えて「1塔3金堂」にしている。「塔と中金堂」は筑紫で設計されており、「東西金堂」は移築時に大和で設計されている。そのため基壇の型式が異なるのである。

「東西金堂」と回廊・西門は同時に設計されている。百済の定林寺を設計したグループの技術者が設計したのであろう。定林寺は6世紀中葉の創建といわれているから、おそらく定林寺を創建した技術者の後継者が設計しているであろう。

「660年の百済滅亡」や「663年の白村江の戦い」に敗れたとき多くの百済人が日本列島に亡命して来る。天武天皇はそれらの人々を迎え入れている（古代史の復元⑦『天智王権と天武王権』）。天武天皇は百済からの亡命者に「水城」や「大野城・基肆城」を造らせている。

亡命者の中に定林寺を設計したグループの後継者が居たのであろう。天武天皇は元興寺を大和に移築するときその後継者に「東西金堂」や回廊・西門を造らせたのではないだろうか。

### (3) 「飛鳥寺の創建（移築）」の復元

飛鳥寺は筑紫の元興寺を移築したものである。元興寺は「1塔1金堂」の「四天王寺式伽藍配置」であった。元興寺の創建瓦は「Ⅲ型式（星組）」である。

「672年—677年」の間に天武天皇は筑紫の元興寺を大和の飛鳥に移築する。そのとき創建瓦「Ⅲ型式（星組）」は大部分を遺失する。そこで「Ⅰ型式（花組）」の瓦を造り、補充した。

瓦工は「Ⅰ型式（花組）」の瓦しか作ることができないのであろう。花谷浩氏は「花組と星組とでは、軒丸瓦の紋様だけでなく、瓦当の作り方や丸瓦との接合技法、丸瓦・平瓦の製作技法など瓦作り全般に明確な違いがある」と述べている。

次に「東西金堂」を追加して「1塔3金堂」の「飛鳥寺」にした。瓦は新しく「XIV型式（複弁八葉蓮華文軒丸瓦）」を造り、「東西金堂」の屋根に葺いた。「東西の二つの金堂」に葺いたので「XIV型式」の瓦がもっとも多く出土するのであろう。

最後に回廊や門を造る。これも「XIV型式（複弁八葉蓮華文軒丸瓦）」の瓦で葺いた。そのため西門からは「素弁十弁の軒丸瓦が見当たらず、それより新しいものばかり」が出土しているのであろう。

こうして「飛鳥寺」は完成した。「飛鳥寺の創建」を箇条書きにすると次のようになる。

#### ○飛鳥寺の創建（移築）

- 609年 筑紫に元興寺を創建（1塔1金堂の四天王寺式） 創建瓦はⅢ型式（星組）
- 「672年～677年」の間に大和へ移築 遺失した瓦を「Ⅰ型式（花組）」で補う。
- 「東西金堂」を新しく追加（1塔3金堂） 瓦はXIV型式（複弁八葉蓮華文軒丸瓦）
- 回廊や門を造り完成 瓦はXIV型式（複弁八葉蓮華文軒丸瓦）

これが「飛鳥寺の創建（移築）」の復元である。